

『父君、難有うございます！』

如座談話で少時持切つて、扱卓に就いたが父は非常に親切であつた。

自分は此嬉しい變化を露子に告げる爲一刻も早くプーヂパールへ歸りたくつて刻々に時計を見て居ると、

『時計を計り見てゐるね、歸里を急ぐと見えるな、若い人といふものは怪しい情愛に眞摯になるんだね。』

『否、父君、露子は確かに私を思つてゐるんです。』

父は答へない。然とも否とも言はぬ様子だが左に右今晚は此家に泊つて朝歸れつて却々聴かない、併し露子は既に自分が出て来る時、那處に悪かつたのだから、此由を告げて先づ安心させた上、明日は又朝早く来るから是非歸らせて呉れる様に切りに頼むと、漸とお許が出て、天氣の好いのを幸ひと、停車

場まで父は一緒に歩行て来て呉れた。生れてから二十四の今日迄此位嬉しい思を爲た事は無く、將來は自分の望通りになるとしか思はれない其所爲か、父を愛した事、此時より甚しい時亦曾て無かつたので。

恰も別れやうとする時、彼は又泊つて呉れるつて頼むのであつた。が自分は断つた。

『お前は眞箇に他に惚れてゐるのか。』

『無宙です』

『夫ちやお歸り。』といひつゝ何か思の湧き来るを拂はんとするが如く額に手を觸して、物言ひたげに口を開いたが別に言ひもせず、唯自分の手を握つて急いで身を退けた。其時の父が語に、

『夫では明朝まで！』

今宵の流車の遅い事、とんと動かぬ様に思はれて、ブーデールへ着いたのは十一時頃、急いで家へ歸ると平常なら窓に光明が見える奴が、今宵は黒闇に鈴を引いて案内しても誰も出て来ない。重々常ならぬ態、覺えてから始めていゝる。終尾に庭番が来て明けたので漸と這入ると、恰度お夏が燈火を點して迎に出た。行きなり露子の室へ這入ったが影も見えない。

「真様は。」

「巴里へお出でになりました。」

「巴里！」

「ハイ。」

「何時？」

「旦那様より一時間後でございます。」

「何にも俺に言遣さすにか。」

「何とも有仰いません。」

といつた儘お夏は出て往た。

自分が一日も家を空けたのは眞實に父の許へ行つたのか、奈何かを見に往たのだらう。否おてるから何か大事の手紙が来たのだらう。ハテナおてるに會つたが別に手紙を寄したらしい口振もなかつたよ。

ム有る。初めに他が病氣だつて言つたのに「露子様今晩見るんぢやありませんか」つて尋ねたわい。然うく、此言つてから何だか約束の有る様に酷く困つて居た。父の機嫌が良かったので忘れて居たが、露子が終日泣いて居たのも怪しい。と夫も之も一ツに纏つて益々疑を強うし、果は父の上機嫌だつたのも變だなど迄。

露子は是非巴里へ往けと家を逐出す様にした、是は一ツ。自分が家に居やうと云ふと少し安心した様な態を爲て見た、是二ツ。何か係蹄に掛つたのかなでも露子が俺を驅したのだからか、俺が歸る迄に歸つて来て何喰はぬ顔に濟して居る意だつたのが、何かの破目で覗くなつてるのだからか、夫でなければ何故一言言ひ遣して置かぬ、手紙でも可ぢやないか、涙一不在一不思議一奇體だねえ。

時は正に是れ既う十二時、到底今晚待た所で歸りさうもないけれども、漸く那迄にして將來の計畫を立て、互に犠牲もされ、受けもして置きながら、今更騙すなぞつて事があらうか。真逆！思ふ丈愚だ、忘れませう、噫、忘れませう。

或は家具に好い買手が付て、取極に行たのかも知れん、那樣して承知はしてくれなければ、率となれば有繋惜しくもあ

らうし、意氣地無し遇をして踏付ける様に思はれぬともいへぬからと、成るべく前以て俺に言ふのは避けるのだらう、寧ろ事萬事片付く迄自分に逢はん事にしたのか知ら、夫ならおてるは委細を知つて居るから心待にしたのも無理は無い、今日歸らんのは片付かなんだので、おてるの許に泊つて居るんだらう、否、僕が氣を揉んでゐる事は百も承知に違ひなし、長く心配させ度はあるまいから、偶とすると今にも歸るかも知れない、併し然ら何故泣いたのだらう、否、其も其廢物だらう、那迄に思切ては居るけれど、有繋に從來使つて身に慣れ、人にも羨まれた物に訣別するんだもの、泣かすには居られまい、其廢事なら勿論宥さねばならん、既う歸りさうなものだ、來れば如廢考へてた事を言ふて、寧ろ遣らうか、など思ひ亂れて居る中に夜は遠慮なく更けて一露子は歸らない。

思ふ程愈々氣遣はしくて既胸に堪切れぬ何か事が起つたのぢやないか怪我？病氣？夫とも死んだか今にも非常な報告が来るか或は夜明になつても今の儘で何にも解らず終か。と切り思ひ悩みつゝも眞逆他し男に情の露を分けたらうとは夢にも思はず不在にして歸らぬのは心からではなく他に仔細のある事だらう殊に其仔細といつても天災地變乃至不時の不幸といふ類だらうと計り思へば人の自惚の強さ！一時も一時間待たうとて尙眠らない。二時尙一時間待つて歸らねば巴里へ往くと極めた既う考へるも可厭になつたから何か書籍をと胸はずとマノンレスコーが卓の上に披けてある見るに何やら巻中の其處此處涙に濕つて居るらしいので其にも心を紊されながら譯もなく唯頁を翻ねて見たが眼は疑の霧に蔽はれて字の意味をも解し得ざるに又パツタ

り書を閉ぢた。

時刻は却々経たん空は雲一面に蓋ひ懸つて窓を撲つ秋の小雨の音微かなるに起きて見つ寝て見る床の空なる宛がら大きな振の様に思はれて坐る首筋に夜寒の風。

窓を啓けて耳聳てたが聳するは樹の間を互る風ばかり見渡す限り死んだ世界。此中へ砂煙立て、馬や車の驅けて来やうとは如何にしても思はれず陰に籠つた寺の鐘が半刻を報す響は野を這ふて川を越えて山に當て給に返る如徳時刻如徳空模様香氣に窓など開けて置けば這入つて来るものは貴棒神か厄の神ア、鶴龜々々。

時計は二時を打つたけれども尙少し待つて見た聞耳を立てても依樣死の世界逝つた人の靈に泌み渡る夜半の鐘が關子を置て響くの計我が心の安からぬに室内の物凡て陰氣な

らぬはなく、竟に座に堪らずして室を出ると、次の室にはお夏が裁縫を仕半で座睡して居たが、戸の啓く音に覺めて、奥様お歸宅ですかと怪訝な顔。

「否、若し歸つたら心配でならんから巴里へ見に行つたッて然言へ。」

「今時分往らッしやるんですか」

「ウム。」

「だッて卿奈何して？馬車なんて在りやしませんですよ。」

「歩行くさ。」

「雨が降ッてゐます。」

「拂はん。」

「御新造様も其内にお歸りでせうよ。假令御歸宅がなくなッても、明日の朝卿往ッしやれば可いぢやございませんか。途で道

刻にでも逢ッて殺されますよ。」

「何有、大丈夫、可いよ、明日歸るからね。」

お夏は甲斐々々しく起ッて外套を出し、肩へ被せ懸けながら、宿屋の女將を起して馬車を雇はせなすつたら、なぞ言ッてくれたが、今時分頼んだ所で、九分九厘は無益、其手間で半分道は行て了ふと耳にも掛けず、夫よりも歩行いて、戸外の風に當れば、逆上も下るだらうと、安丹街の家の鍵を懐中し、お夏に門迄送られて、雨を胃しつゝ出發た。

初はスタ／＼呷けたが、雨に泥濘を捏ね返した道で、疲れる事夥しく、小半時すると息を繼かねば、既う前めず、汗は身體を洗ふ如きを、一息入れて又歩行き出したが、夜の闇さは咫尺も辨せず、一步踏出す毎に大入道が我を目懸けて、掴み掛るかと思ふと、臆を冷すと、鼻の尖を衝かん計り身をすれ／＼に突立つた路

傍の大木

勇を鼓して歩武を疾めがらく行く荷車を二臺迄追抜いて進む内一臺の馬車が風を切つてブーデールを向けて来る。颯と磨れ違ふ時若し露子は乗て居ないかと一點望が閃いたので立停りさす露子露子と叫んで試たが何返事も無く飛ぶが如く行く影を見へすなるまで見成つて又歩み出したが二時間して街端れへ來着いた眼に巴里の風物が見へ出すと勇氣は恢復して一目散

夜静に行く人一人なき中を傍目も振らず急ぐ中に夜は朝朗と明初めた安丹街へ着く頃には巴里の街は既や覺めんとして半夢ながらに動く様子自分が露子の家へ入つた時恰度寺の鐘が五時を打つた家の主には以前から時々心付がしてゐるので自分と露子の交も知つてゐるし朝五時と云ふに露

子を訪ねて来るに不審も打たず拒みもせぬのでわけもなく直と這入つた尤も入り際に露子が在るかを問ふても可かつたが居らぬと言ふかも知れぬ未可疑の間丈は希望が残つて居るのだから二分間丈でも長く疑つて居る方が優と直に上つて物音がするか戸口に立ちながら聞き耳を立てたが何も聞えず此處にも地方の靜かさが引續いて居るかの如く森として物音一つせぬ戸を啓けて突と這入ると窓掛が犇々と懸けてゐるまづ食堂の窓掛を掲げ足を寢室の方に向けて入口の戸を押すより早く飛入りさす窓掛の紐を把て力の限り引揚ると薄明りが窓を洩れるに飛んで寢床を覗くとこは奈何に中は空

次から次から戸を啓けて間と云ふ間は悉く見て廻つたが誰も居らぬ是丈でも半狂亂直ぐに化粧室の窓を啓けておて

るを呼んで見たがおてるの家の窓は閉ぢた儘で起さるも
ないで下りて家の者に昨日露子が来なかつたかを聞くと、

「ア、隣の春田様とお光来りました」との話。

「僕には何も言ひ置て行かずか。」

「否。」

「夫から何如したか知りませんか。」

「馬車に乗つてお出ましになりました。」

「甚麽馬車で。」

「自用車でしたよ。」

何の事だか更に解らなくなつた。倉皇飛出て隣の家の鈴を
引くと、家の者が取次するのでおてるに逢ひたい由を告げる
と、

「春田様は未だ歸つて見へませんよ。」

「間違ひかね。」

「エ、昨夕春田様へ宛てゝ来た手紙が未だ渡さずに如慙し
てゐる位ですもの。」

と手紙を見せる儘に、何心なく表面を見ると、紛ふ方もなく
露子の手であるので、手に取つて見ると、「おてるどの」として其
横に有馬様へ御渡し被下度とある。

「此は僕へ來てるんだ」と表書を示すと、

「貴君は有馬様ですか。」

「然だ。」

「ア左様々々、春田様の許へ熟く見えませしたつけ。」

虎の子でも授つた心地で挨拶そこへ直ぐに町へ出て封
を切つた計らざりき青天の霹靂否其よりも尙酷く驚たとい
ふは其文言。

「御身が此手紙御覽の時分は私はもう他の男にかゝりわひ居り候に付兩人が中は此かぎり候。

「歸國して父上、妹様と一緒に御暮し被成度候。今は早や末永からぬを祈る生涯の中、しばしにてもあなた様に惚られたつた一度の幸福を得たる後藤露子といふ者御失ひに相成り、御歎かせもあらんかなれど、われらが身の不幸をつゆ御存知なき若き妹御様のお側におはし候は、間もなく御わすれなされ候事と存し。」

讀み果るや、氣も狂亂危なく其處に倒れる處、眼は霞み、血は湧き立つたが、良少時で漸う我に復つた胸はせば我が悲の深きには似ず、他の人の生活向は變らずに續いて居る不思議さ。單身此打撃に堪へる迄に強い我でも無いので、直ぐに父の來てゐる事に氣が附いた。父なら、甚麽事で僕が悲んで居やう

と、必然俱に悲んで呉れる。一刻も待てんと宛がら狂人の様に巴里旅館へ驅け付て、投げるが如く飛び込むと、父は書見をして居たが、心待にしてゐた様に別段驚た風もない。物をも言はず身を父に投げ掛けて、露子の手紙を渡すなり、寢床の下に打倒れて、思ひのまゝに泣入つた。

三十三

稍正氣に返りはしたものの、今明け行く日が昨日の日と同じものとは無理にも思ふ事が出来ないで、奈何かした拍子に夢心地になり、憶起す事は能ぬが何かの差間で、昨夜は露子と一緒に暮す事が能なんだが、今日にもブーデパールへ歸りさへすれば、相變らず露子が待兼ねて居て、却て吾が不在にした理由を尋ねるだらうなど、思ふ事屢々である。人の生活も此總の様に習慣が一つ定つて了らうと、其習慣一つ無くするには總て

を滅茶に爲て了はねばならぬものらしく、此絶縁が夢にはあ
らで、却て眞實なるを確めん爲、時々露子の手紙を繰返しては
讀むのであつた。

精神に受けた打撃の酷さに身體も利かぬ迄力が脱けた上
に、前宵無理して歩いた疲が、一時に出て来た弱身を、父は茲ど
と乘て、改めて一緒に國へ向けて發足つべき約束を求めたが、
自分には既議論するの氣力もなく、此上は何かの愛情に疵は
れる工夫をせねば生きて居る事覺束ないと思たので、請はれ
る儘に約束し、却て如慙不幸の時にも尙父は悦んで我を慰め
んとせらるゝ心をつくづく嬉しと感じたのである。

總て夢の如くで何も記憶えないが、其日五時頃父は馬車を
雇はせて自分と合乗になつた。心付くと何時の間にか自分の
荷物を括ませてあつたらしく、背後の馬車に積乗せてある。夫

でも未だ自分は何を爲て居るか氣が着かずに居ると、馬車の
進むに伴れて漸く市街は見へなくなる。道は遠々淋しくなる。
茲に初めて戀しい巴里を離れると心付くと、涙は忽ち潮を切
つた如く、止め度もなく溢れるのであつた。

父其人の言辭でも我を慰むるに足らぬ事は父も既知つて
居るので、泣けば泣くまゝに爲せて一言も言はず、唯傍に道連
のあるを想起させんとてか、時々手を握り締るのみである。

其夜一寸眠た夢に露子に逢ひ、覺めると露子は亡くて身は
馬車の中に在るに、驚くまい事か、一時は飛上つたが、驢て我に
復つて首がつくりと低頭たまゝ、父には敢て一言も口を利か
ない。若し話し掛けでもして「な、此婦人はお前を思つてやせん
と言ふたぢやないか、それ見る」など言はれはせんかと思つた
ので、併し口に着くまで此度の事に關係した事は一切話に上

らず仕舞で先づは結構だつた。

家に入つて妹と抱き合つた時、忽ち露子の手紙の文首を思ひ出し、嗚呼親切は親切ながら到底露子を忘れさす事は能ないなと一目に踏んで了つた。

恰度獵の時候で、是なら随分氣晴にきらうとの父の發案に、近處境隈の誰彼集めて山獵を催すといふ事、自分は否とも言はねば、進んで遣る氣もなく、出發以來の通り、木偶同前にお伴をする。愈其場まぢに臨むと自分にも持場が極つたが、銃には彈丸も込めず草の上へ抛り出して、合ふては離れ、絡まつては散る雲を眺めて、物思ふでもなく思はぬでもなく、何とやらん廣野の上に、魂彷徨ふかの心地時々誰か我が名を呼んで、十歩も距てぬ所を飛ぶ兎を指してくれるのを、他人事の様に聞いてゐた。

父は一々此様子を見もし聞きもして、表面は静かに見えても、心の裏は湧き返る様なのを、慥かに知つて居たので、今こそ一旦切れて居るが何時か震返しが来て酷い事にならう位の覺悟はあつたに違ひないので、是ぞと氣の付く様な慰め方は爲す、唯氣分を紛らせようとのみ努めて居た。妹は素より何にも知らないので、以前極氣輕者の自分が俄かに鬱ぎ込む様になつたを甚く不思議がつて居る計、時々我の深く憂うれひに沈んで居るを、父が心配げに眺めて居るに驚いて、不孝の罪を詫び心に堅く父の手を握る事もあつて、漸く一月は経た、既う辛抱が切れ果てた。また晝となく夜となく、心は露子の上にはかり飛ぶ。確かに尙深く惚れて居るので、奈何しても忘れる事が能ぬ。結局又惚れるか、左もなくば憎むか、此二ツの他はない。假令憎むとしても、今一度、而も直ぐに逢はずには居られない。と此願が

胸一杯になつて、力の脱けた體を自由自在にさいなむので、思ひ立つては一月將來とか一週間將來など言ふて居られず、すぐ翌日逢はねば此胸が治まらぬ。で早速父に逢ふて巴里から用事で是非来いとこの事だから、直ぐ歸るで一寸遣つて貰ひたいと言ひ出すと、父は直ちに其底意を見て取たらしく断じて往くなと頻りに言張つたが、若し此儘にして往かさずには置けば一命に關はる程の事も爲象まじいのを見て、盛く自分を抱き寄せ、涙と共に直ぐ歸へる様繰返し頼みつゝ、漸と許してくれる事となつた。

巴里へ往く途すがら一睡も能ぬ一體彼地へ着いて何うする意だらう、自分は些とも知らん、唯何か露子に關係した事だと思つて居る計、不取敢家へ寄つて着物を更るが、否、先づ極樂街を志して出た。半時間すると向ふの方に、ロンポアンの方か

らコンコルドを指して来る露子の馬車を見た、自分の見慣れた的、其儘であるから、馬も車も買戻したのに相違ない、と見ると、中に人は居らん、何心なく四邊を胸すと、露子が従來見た事の無い婦人と連立て歩行て居る、呀と思ふと先方でも磨違ふ時眞蒼になつて、口元に淋しげな笑の色、我は胸も張裂る計りだつたが、彼が件の婦人を伴れて馬車の傍へ歩み寄つた時、一生の勇を鼓して、冷淡にお辭儀を爲て何氣ない態を粧ふた。唐突も唐突、如慙も不意に遭逢しては、有紫の露子も魂消たに相違ない、二人の交の破れるや否、自分が故郷へ立つた事は聞て居たらうが、今又茲に突然面と見合せたのだもの、何れ何か意が有て歸つて来たのだらう、位は解るだらう、さらば其意といふは何だらう、と是に又一苦勞して居る筈。

今若し露子が零落れて、卒塔婆小町の哀れの姿でも爲て居

る事なら、茲復讐の時、金びら切つて助けて呉れる。助ける以上は罪も宥して、一切水に流しも爲やう。否實は爲たいが今日見た所極めて結構有福な態、自分と一緒に生活して居た間は自分の仕てやる事の能なんだ榮華を、誰かは知らぬが爲せるらしい。して見ると彼が我と切れたのは慾得づく、扱も見下げ果てた根性、我戀も左程卑しいものであつたか。我其人の品格も卑いものか。己先方が然なら其丈の返報、我に工夫のあからうものか。いで、一番彼を宥めるは自分が毫末練のない態を見せるに越す術はあまるまい。然だ、其態を爲やう。彼が眼に計でなく、誰が目にも然見える様、是非遣つ付けてくれる。と決心が付くが否や、強て笑顔を粧いつゝおてるを訪ねた。下女が取次に出て、五分間計應接室に待つと、おてるが出て其居室へ伸れられた。恰度自分が席に着いた時、應接の間の戸が啓いて、輕げな響音

が床に響くと、應て表の戸を荒々しく閉る音、

「お差支はありませんか。」

「否些とも露子様が其處に居たのよ、貴君が見えたので逃げて行つ了つた。今歸つたのは露子様でさあね。」

「僕を怖がつて居るのかね。」

「否、貴君が露子様に會ふのは可厭だらうつて。」

「だつて何故？」ばや情が迫つて呼吸も塞るのを強ひて堪えながら「奴は馬車や家具や金剛石の爲に自分と切たんだ。夫は正當さ。夫が懶巧なんで、僕は何も文句はないさ。今日僕は會つたよ。」と何氣なくいふと、おてるは是が以前那迄逆上させた男かと自ら疑ふものゝ如く自分を凝視つゝ、

「何處で？」と尋ねる。

「極樂街で。誰か他の婦人とだつた。大變美人だつたよ。誰？ 他

は』

『奈何様態な婦人？』

『瘠やせぎすな、色白で、採と上げの長い、可愛い眼をした、美しい婦人だ。』

『ア、其は林子様だ。那の方眞まこと當あたに美しい容よう色いろね。』

『情こころ夫おとこは誰たれだへ。』

『誰も無し、誰れでもなの。』

『家いへは何どこ處ところ？』

『トロンシエ街の三番、貴君情あなたになる意い？』

『夫は解わからんさ。』

『で露子様は？』

『既すでう何なにとも思おもつちや居ゐないといふのは實まことは嘘うそだがね、人ひとと
いふものは切れ様に因よるからな。僕わがも實まこと際さい非常ひじょうに惚ほれて居ゐ
たけれども、那樣やうお手て輕かろにといと退ひかれると、惚ほれ過ぎたのが

馬鹿ばかだつた様に思おもふからね。口くちには如ごとく言いつたもの、心こころは四
苦し八は苦くで、油汗あせが額かぶに流ながれ出る。

『露子様だつて餘程よほど惚ほれてたんですわ、夫は貴君あなたに解わかてるで
せう。今いまでも依然いぜんですよ。其證據しやうこには、今日けふ貴君あなたに逢あふと、直ただぐ其
足あしで私の處ところへ其そのを言いふて來きたんだもの。此家このいへへ來きた時は、胸むね慄おそ
を爲なして居ゐるの、私氣わがいき絶たでも爲なるかと思おもつたわ。』

『フム、で何なにと言いつて？』

『有馬様ありまさまが必然しやうぜん此家このいへへ來きに違ちがひないから、來きたら堪た忍しのしてや
つて下くださいつて頼たのんでおくれつてね、散々さんざん私わたしを口説くちくの。』

『ふ、僕は堪た忍しのしてゐるさ、何なになら貴女あなたから然さ言いつて遣つて可いよ、
他ほかも却かえ々々善よく爲なして呉くれたさげれども、結局けつぐうは那樣やう事ことになると
覺悟かくごして居ゐなけりやならなかつたのだ。寧いづろ一ひと緒ごに住すつて居ゐた
ら今頃いまごろは甚し慮りなつてゐるか、夫おとこを考かんへて見みれば、却かえつて切きれて呉く

れた方が難有い勘定さ。」

「貴君が其歴に譯の分つた事を言つてくれりや露子様も喜ぶでせうよ、好い時に切れたんですよ、露子様が家具を賣らうつて言つた代理商の野郎が貸主の所へ大仰に借金の高を觸れて廻つたので、皆が怖氣が附いて二日の内に沾つて了うつてえ切破にあつたんですもの。」

「でもう悉皆済んだの？」

「幾分か片附いたの。」

「誰が金を出して？」

「N伯爵調法なもんで如徳時の間に合ふ様な人が丁と出来てるんでさあ要之伯は八千圓出して到頭思ひが叶つたつて譯、尤も露子様の方で些も思つてゐない事は熟く承知なんですけれども、夫でも何とも言はないの、馬車も買戻し、寶石も買

受けし、公爵の後嗣で幾何でも金は出すし、露子様が如徳と言や何時でも一緒に地方へ往て、静かな生活でもするつて言つてるの。」

「何うしてるの、今始終巴里かへ？」

「貴君が在なくなつてから些とも地方へは往かず、私が往つて家を盡んで来たの、貴君の物も丁と一括にして私の許に預つて在りますから、序に取りにお寄しなさいよ、悉皆揃へて在ります、けれども貴君の頭字の附た小さな箱一ツ丈、露子様が殘して置きたいつて持つてますが、眞箇に貴君お要用なら然言つて私貰ひませう。」

「與つて置て可いよ。」と受けたのが漸う、田舎で生活した折の樂しさを思ひ、左も右も露子が自分の物を殘して置て、忘れまいとしてくれるかと思ふと、心から涙が湧き出るを覺へるの

で、今若し露子か這入つて来れば復讐などの考は忽ち消えて、彼の脚下に身を投げ掛けられたらと思はれる。

「私那の娘に交際つてから此頃の様事事は知らない位、大抵毎晩眠す夜會つて言へば必然往く料理屋へ往く酒は呑む、過日もお酒の爲に一週間床に就て漸と醫者が起きてても可いつていふと命知らずに又初めたの貴君行て逢ひますか。」

「往た所で何になる。僕は貴女の所へ来たんだ露子に用はないさ。他より貴女の方が以前から知つて居るし、常時親切にして呉れるから来たのさ。露子の情夫になつたのも貴女のお疵蔭だし、今度切れたのも貴女のお疵蔭だもの。」

「全くですとも、私も露子様を引離すには能る丈の骨を折つたのよ、必然貴君後で私の恩が解るわ。」

「三重に御恩になつてる譯だね。」

言ふ言毎に眞摯の様に取るので既う可厭になつて来て突と席を起つた。

「貴君既う歸るの？」

「ハア。」

既う聞のも澤山だ。

「今度何時来るの？」

「又直ぐ来る。左様なら。」

「左様なら。」

おてるは戸口まで送つて来た。眼には忿怒の涙胸に復讐の炎、我は内外水火に攻められつゝ室へ歸つて来た。考へると露子も他の婦人と違つた所はない。那程自分を思つて居たのだが、依様昔の寛濶な生活の味が忘れられず、我を捨てゝも馬車を求め、酒に荒む事になつたのであらう。と身は床に入ながら



嫌られぬまゝに細語つのであつた。若し自分が口に粧ふ通り
實際冷淡に考へたらば、露子の今の亂暴な生活方は、絶へず思
ひ出る心の苦を忘れんとての所業といふに心付く筈である
のを、不幸にも善玉悪玉の喧嘩は、悪玉の勝利となつて、是非復
讐をしてくれやう、奈何すれば好いかと心は是ばかり煩惱の
愁のさても卑しき！

自分が見た林子といふは、よし露子の友人でないにしても、
今度彼が巴里へ歸つてから、一番多く一緒に居る婦人なので、
恰度此頃舞踏會を催すといふ噂だから、露子が往くに違ひな
い、是非一つ往きたいものと、散々工夫して、漸と招待状を手に
入れ、顔を出すと、恰も興酣で、躍り唄ひ、叫ぶ態、却々太陽氣、露子
と組になつて躍つて居るのは、N伯で、此婦人は拙者の有物で
ございといはん計り、得意氣に見せびらかして居る。自分は露



察られぬまゝに狼狽つのであつた。若し自分が日に粧ふ通り
實際浴後（お風呂後）に考へたらば露子の今の亂暴な生活方は、絶へず思
ひ出る心の苦を忘れんとての所業といふに必付く筈である
のを不幸にも善玉悪玉の喧嘩は悪玉の勝利となつて是非復
讐をしてくれやう奈何すれば好いかと心は是ばかり願ふの
念のさても卑しき！

自分が見た林子といふはよし露子の友人でないにしても、
今度彼が巴里へ歸つてから一番多く一緒に居る婦人なので、
恰度此頃舞踏會を催すといふ噂だから露子が往々に違ひな
い是非一つ往きたいものと散々工夫して漸と招待狀を手に
入れ顔を出すと恰も真面目で躍り唄ひ叫ぶ態却々太陽氣露子
と組になつて躍つて居るのはN伯で此婦人は拙者の有物で
と云うといはん計り得意氣に尾をばらかして居る。自分は露

子と反對の處に爐に憑れて彼の躍るのを見てゐると何かの拍子に偶と自分を見るや、殺那に色を易へて蒼い事死人同然自分は有聲に哀を催して、眼色と手振で挨拶をしたが此會が終ると彼は歸るのである。夫も自分とではなく、那馬鹿殿様と歸るかと思ふと血は我顔に湧き上つて何か彼二人の交を目覺しく害ふ事もがなと我しらす思ひ入るのであつた。

四人組の舞踏が一順終ると、自分は主婦の許へ挨拶に往つた。林子は客への待遇心か、雪の様な胸と玉を伸へたらん双の肩とを惜氣もなく現はして居る。其美しさ、容姿から言へば露子にも優つて居る。殊に自分が林子と對話をして居る間、露子が異なる眼色で彼を見たにも明かに林子の容色の優れたのが知れる。此程の婦人の情夫になれば、N伯程に得意になつても好し。此丈の容姿なら露子が起させた程の思ひ、其程の樂、其程

の懸、我に興へるには十分である。さらば逃へ通り、恰度林子に情夫の絶えた今、關係を付けるに何の遺作も在たものではな
い。切離れよく金さへ振舞て彼の眼を惹けば夫で済んだ。此婦人我有にしてやらうと決心て、手を把て躍り初めると、半時間計する間に露子は更に眞蒼になつて、外套深く引被ぎ果せる哉、惜々として歸つて往つた。

二十四

此丈でも随分窘めたのを、自分は尙飽足らず、露子が未練あるに乘込み怖々ながら更に窘めたので、露子が死んだ今になると、奈何に惠深き神も果して我が悪を許されるか否は甚だ疑はしく思はれる。

騒々しさの限りを盡した晩餐が済むと賭博が初まつた。自分は林子の隣に座を占めて、思ひ切り無頼着に金を投り出す

ので、林子は自然我に目を着けた。瞬く間に千圓か千五百圓計、贏て累々と卓の上に投り出して居ると、林子は欲しさうに眼を注いで居る。他の人達は皆全然勝負に氣を奪はれて林子を顧る者さき中に、其丈の餘裕を有て居たのは我たゞひとり。終夜勝ち續けたのも自分なら、林子が場錢から、多分は家中の有金悉皆敗けて了つた折、金を授けて續けさせたのも亦是自分。朝五時來客が皆立つた時、我が懐は差引貳千五百圓の贏であつた。客一同階子を下り掛つた時、後に殘つたは自分一人だつたが、誰も見知らぬ顔なので、心付くものもさく、林子が燈を持って客を送り出す時、自分も乘に跟いて往たが、半途回顧つて、

『是非一寸話がある。』といひ掛けると

『明日光來い。』と歸さうとする。

『否、今。』

『何？御用は、』

『今いふさ。』

いひながら室に歸つて。

『負けたぢやないか。』

『エ、』

『家の有金全體か。』

林子は躊躇してゐる。

『隠す事無い打明けて。』

『ハア、實は然なの。』

『乃公は貳千五百圓勝つたのだ。今晚此家に泊めて呉れ、ば此金呉れてやる。』

ザラ／＼と投げ出した花の山吹電燈に映らふ綺麗ひやかさ、誰しも否やは有るまじき光。

『何故其麼事いふの？』

『無論惚れたからさ。』

『否、貴君は露子様に未練が有るので、面當に私と情交にならラツてんでせう。可哀想に、私の様な者騙さないもんですよ。まだお見立に預る程の年齒ぢやありませんからね。』

『で、可厭だツてかへ。』

『エ、』

『夫なら金を離れてなら情交にならうといふのだらう。そいつは、此方で御免だ。な考へて見るが可。若し僕が誰かに持たして寄遣したら、無論金も請取り、注文も承知したに違ひない。唯僕が自身で直接に話したばかりだから理由は奈何だらうと其麼事言ひツこなして受取つてお置きね。お前丈の美人だもの、乃公が惚れるに不思議はないぢやないか。』

露子も林子も同商賈同じ賈の婦人だのに初めて露子に逢つた時、決して今言つた様な詞を出せなかつた。是れで見ても奈何計露子には惚れて居たか、解る。尤も露子には林子に見られぬ自然の情が閃めいて居たので、今茲に取引をして見ると坐る林子を蔑視せずには居られない。

翌る日正午頃林子が其家を去る時は既其情夫といふ譯であつたが、彼が例の二千五百圓に對して義務の様に大安賣した世辭や口説や親切や愛や悉く憶起しも爲ない其癖此婦人の爲めに資産壞した者、勤くはないので。

此日からといふもの、自分は露子を水責火責で、一刻として安ませる事はない。無論林子と露子は既に互に逢はぬ様になつて、仇同様、自分は露子への意氣張づく、林子の馬車も買つて遣る。金剛石も買つて遣る。賭博は打つ、酒は飲む、其他這度女と

苟も情夫になる男のする事、一つとして爲ぬ事なしで、自分の此との交は既や世間一般の評判となり、おてる迄が釣込まれて、到頭自分が全く露子を忘れたものと思ふ様になつた。露子は自分の底意を悟つたのか、夫とも他の人同様我に欺かれたのかは知らぬが、自分が彼の上に加へた害に堪へて、下卑た報復もせず弱音を吹く事もなく、有弊は椿姫の品位を保つて居る。併し自分と出會ふ毎に、愈蒼く、愈沈んで居る所から見ると、確かに窘んで居るに相違ない。我戀は今既憎悪となつてゐるので、日毎惱んで居る色を見る毎に、厭ひ極まると計、自分の行狀が餘り下品に、且酷くあると、露子は眼を擧げて祈る様な色を示すので、自分も餘りと心付くと耻かしくなつて、今にも其脚下に有死を請はうと迄思つた事も幾度だつたか、數へられぬ。さりながら悔むも束の間、搦て、加へて林子が露子さへ窘

めれば奈何な無心も聴かれるといふ秘傳を知ったので、常住
我を煽て上げ、機會さへあれば品もたしきみも棄て、執念く
露子を窘めるので、到頭露子は自分と林子に遭逢すを慮れて、
舞踏會へも劇場へも往かなくなり、既う直接に窘める事は能
なくなつたので、無名の手紙をとし、遣る、林子を唆かして
は露子の悪評を觸れさせる、勿論自分も觸れ廻る。

我にして如慙なつたのは眞箇に氣が狂つたのに相違ない、
手もなく悪い酒に酔つた様なもので、精神は何にも知らない
のに手は大變な罪を犯して居る、然るに露子は之に對し、靜か
にして取合す、品位を保つて濟まして居る所、我が眼から見
て、奈何しても自分より優つて居るのが又更に憎々しいので、

或夜林子が何處か出懸けた拍子に露子に逢つた、露子は後
にも先にも唯一度此時ばかりは道さず林子を窘めたので、到

頭林子の負けとなり、烈火の様になつて歸つて來た、露子も悶
絶し人に伴はれて歸つたさうな歸ると林子は口早に其の夜
の経緯を告げ、單獨の所を見懸けて復讐をするとは、露子も餘
り卑怯の舉動、恥と手紙を遣て、以後は自分と一緒にあらうが
あるまいが、左に右自分の愛する婦人だもの、尊敬しなければ
肯かぬ旨を、瞭然と云ふてやれと主張るので、勿論早速承諾し
て、罵り辱め、苦しませ、歎かせる事の思ひ付かるゝ限りを盡し
て、書き列べて遣つた、此度は哀れにも露子が既う答へずには
辛抱の能ぬ程であるので、自分も確かに返事が來ると信じ、一
日待つ意で家に居ると、果して二時おてる女史の御入來、
極めて平氣を粧ふて用事の趣を訊ねたが、今日は春田夫人
平常の様に御機嫌麗はしからず、心から哀を覺へた聲で、自分
が巴里へ歸てから今日迄、三週間、機さへあれば免さず、窘め

上げた無情に、露子は全く弱り切り、誠に前宵の都合と今朝の手紙で、既らびつたり床に就て了つたとの話、要之一言も我は責めず、唯身體も精神も弱り果て、既我が無情の舉動には堪へ切れなくなつたから、少しは憐んで寛めて貰ひたいよし、言葉盡して頼んで寄したのである。

「後藤露子が僕を那の家から逐出すのは道理だけれども、僕の愛する婦人を、僕の情婦だからつて容めるに至ては、僕決して許さないさ。」

「人情も何にもない婦人の爲に、貴君は好い様にされてるんですよ。貴君は露子様惚れて居る、全く併し惚れて居るから、つて、防ぐ力もない婦人を苦めるには當らんぢやありませんか。」

「露子様はお大事のN伯爵をお遣しなされば可夫で兩方割

等だ。」

「其は彼の娘が爲ないつて、事貴君も知つてるぢやありませんか。だから既らお止なさいな。貴君が露子様の容子を見たら、自分の爲さる事が耻かしくなりますよ。可哀想に、色は眞蒼になつて咳ばかりしてさ。既ら將來は長くないのですからね。」

おてるは自分の手を執りつゝ又

「左も右光來つて會つて上げて下さい。甚麼に悦ぶか知れないから。」

「俺はN伯に逢ふのは大嫌だ。」

「N伯は些とも彼家に居た事なし。露子様も他の人には既ら能う辛抱を爲ないんだもの。」

「露子が俺に逢ひたいと思へば、奴俺の宿所は知つてるぢやないか。自分で来るが可。俺は決して安丹街へは踏み込まな。」

「他の娘が来たなら酷い目に逢はしやせんか必然善くして遣つて呉れますか。」

「大丈夫。」

「さう露子様屹度来るわ。」

「来りや来さすさ。」

「貴君今日お出まし？」

「今晚すつと居る。」

「夫なら然言はう。」

と匆々におてるは歸つた。

林子の許へは今晚行かぬ趣の手紙すら遣らない尤も一週一晩も碌々に尋ねない位で、些も氣に懸らぬ先方では屹度俳優か何か喰へ込んで楽しんで居るわと信じながら、何の氣もしないのである。

一寸飯を喰ひに出たが直ぐに歸つて室に火を起させ權助には一晩の暇を呉れた。

時や遅しと我が待ちし間の心に起つた異様の感と、茲に細かに述べる事は能ない九時にもならうといふ頃案内の鈴を聞いた時、先刻の程からの思が一團になつて戸を啓けるや否くら／＼と眼暈する如く倒れる足の踏締められず、踵々と後の壁に倒れ懸つて漸と身を支へた位である。併し幸に階下の室は薄暗かつたので、我が顔色の變つたのは甚くも目立たずに済んだ。

露子は這入つて来た眞黒の服に覆面して居るので殆ど顔が解らない。應接室へ這入つて初めて覆面を除た顔を見ると、奈何様宛然大理石。

「聊私に逢ひたいとお言ひだから私来ましたの。」

と言ふかと思ふと、双の手に面を載めて絶へ入る計り泣き出した。我は近々と進み寄つて、聲も自から潜みつゝ、

「奈何したの？」

と尋ねたが、涙に聲を包まれて、彼は一言の應もなく、唯我手を緊と握るばかり、少時して稍氣を取直したか顔と舉げて、

「卿は眞個に非道い事ね、私は何にも爲ないのに。」

「何にも？」と我は冷かな笑を浮めて、

「時と場合で詮方のない事は別だけれども、其他何にも。」

今露子を見る心持、此は此境遇に立つ人でなければ解りもせず、言はれもせぬ嘗て彼が逢ひに来た時、依然今坐つて居る其處に坐つて居たのであるが、其時已來彼は他の男の情婦である麗はしの玉の腕は我が頭ならぬ他し、男に貸す手枕となつて居るのだけれども、我にもあらずつい手を伸べて之を握

締めつゝ、接吻すると、尙以前同様否恐らくは前にも増して深くも我の惚れて居るのを、沁々と覺へられた。

自分から今晚の用向に就て話を切り出し、難いのは露子も知つたと見へて語を繼ぎ、

「私はね、卿、今日は二つ頼みが在て来ましたの。昨日私が林子様に爲た事は堪忍して貰ひたいのと、此上尙審めやうと思つて被在る事でせうが、少し加減して貰ひたいのと、夫丈、卿は其意か奈何か知らないけれども、巴里へ歸つて来ますつてからは、幕無の審め通しで、私も眞に弱り切つて了つたの、少しは可哀想と思つて下さるでせうね、人情のある男なら、私の様な可哀想な病人に復讐を爲ないだつて、他に幾らも高尚な事があるつて事は、お解りです、一寸此手を持つて御覽、私熱病のよだが、往昔の撚を戻したい爲でなく、私を關はずに置いて貰

「ひたひ計に起て来たんですよ。」

手を把つて見ると成る程燃へる様で、毛裘の外套を被ながら戦々身慄して居るので、掛けて居る椅子を爐の方へ引寄せて遣った。

『すると那の晩徹夜地方で待てるのに歸つて来んものだから、巴里まで行く／＼来て何にも解らず、丁度、到頭半狂亂になる様な手紙を押し付られたね、那の時でも僕は些とも苦痛は爲なんだと貴女は思ふのですか、な、那の位思てる私をよくまあ貴女騙せましたなあ。』

『其事は既う言ひつこなし、私は其事で来たんぢやないんですもの、唯仇敵になる丈は止にしたいのと、尙一遍貴君の手が握りたいからですわ、貴君には歴然とした若い美しい情婦があつて惚れて被在るつて評判だし、精々お兩人でお楽しみな』

「すつて私の事は忘れて了つて下さる。」

『貴女は無論お樂なんでせう。』

『私が樂みらしい顔して居ますか、悲んでるものを調弄ふなんて、罪が深ふござんすわ、何故私が悲んでるか、何の位歎いてるか、誰よりも貴君は善く知つてるんぢやありませんか。』

『若し貴女の云ふ通りなら、夫は貴女の自業自得さ、心次第で甚麽でもなつたんだ。』

『否、然ぢやありません、私が甚麽に思つたつて時と場合といふものが許さなんだのですもの、貴君は浮氣女の満らん慾で爲た事の様に思つてらつしやる様だけれども、決して然ではなく、全く萬々止むを得ずなんで、早晩貴君も其がお解りになる時があるし、其時になつたら必然許して下さる丈の理由があつたの。』

『今日何故其理由を言はないんです。』

『言ふた所で破れた交が舊のものになるぢやなし却て貴君が別れてはならん人と別れる様な事になりませうから。』

『誰の事?』

『今言へないわ。』

『夫なら今のは嘘を言つたんだね。』

露子は立起つて戸口の方へ歸りかけた。背ではオヘラコミツクで我を調弄した痴漢が、今茲に色蒼白めて泣きながら言も發はず悄悄歸るのを見ては、無限の感に堪へられず、

『貴女歸つちや可けなひよ。言ひながら戸口に立塞つた。』

『何故?』

『從來甚度にされたにしても依樣可愛いもの。今晚お泊り。』

『明朝逐ん出さうとて? 其は可けなひわ。私と貴君とは運が』

違ふので如何しても添はれや爲ないんだから、既其庶事をして燃を戻す様な事爲ん方が賢よ。今ぢや未だ憎まれてる丈だが、其庶事をしたら此上又蔑視されるわ。』

『否、露子。寄體にも此婦人に觸れると、忽ち舊の戀と舊の希望がひら〜と湧き返つて、我が聲は叫ぶ如くなる。否、僕は何も彼も許す前の約束通り、樂しくして暮すから。』

露人は疑はしげに小首を傾けたが、

『私は卿の奴隷、同然犬同様に思つてるんだから、卿の爲たい次第、卿の有になりませう。』

と矢庭に外套と帽子をぬぎ捨てた。前の程から病氣の所爲で顔は逆上る。呼吸ははずむ、苦しくつて堪へられなないので、漸と落着くと然も苦しげな強い咳。

『馬丁に然言つて馬車を返して頂戴。』

自ら降りて馬車を歸し、室へ歸ると露子は爐の前に近々と寄つて居たが、惡寒の爲めに齒はがたくと慄へて居る。見るに憫れさ一抔で突と我手に掻き抱き、温順しく我が爲す儘に任せた氷の様に冷たい躰を着物脱がせて寢床へ伴ない。我は傍に坐つて機嫌を取つたが、彼は一言も言はず、唯自分を見て笑ふ計り如何にしても不思議な晩である。宛がら生命其物が接吻になつて了つたかと思ふ位、彼は不漸に我を接吻する。我は又戀の炎の心に燃え立つ瞬間再び彼を他し男の有にせじとて、我が戀の火に焼き殺す意かと怪む計り、無上に彼を可愛がつたものゝ一月も此鬪子に戀をしたら、残るものは二人の靈魂と二人の骸のみとなるだろう。

黎明には二人とも覺めたが、露子は蒼いと云うよりは鉛の様に色を失つて一言も言はず、唯時々球の様な涙が點々と零

れ、頬に留つて金剛石の光を放つて居るに、痲痺へる手を伸て我を掻き抱き、つ方なげに床の上に倒れ、伏すのみであつた。瞬時我はブーデバル已來の事を忘れた如く、
 「既う巴里を止して地方へでも往かうか」といふと露子は頗る驚いたらしく、
 「否、其は大變大變な不幸になる事よ、私は此上卿を悦ばせる事は能ないわ、少しでも呼吸の通つてる間は卿の奴隷になつてますから、卿の思つた時、晝なと夜なと光来い何時でも私は卿の有よ、併し將來一緒に暮さうつて事は大層悪いの、其座事をすりや卿も大變な不幸、私も怖しい不幸になるの、未だ雲時は私は此通りで居ますから、其間は慥麼なと卿の勝手に爲さうだが、其上の事は御免ね。」

彼が歸つて了ふと其淋しさ、火が消へたといふが其にも優

る思二時間も経つたのに、尙彼の傍を殘した枕を凝視つて、我が戀と我が嫉妬の二つに懸る一つの身は、抑も奈何なる事やら考へるが如く考へぬ如く、茫然として寢床の側に坐つて居た。

五時になつて自分は何の爲とは知らず安丹街へ出て往くと、お夏が戸を啓けて、さも困つた調子に、

『御新造様お目に懸る事能ませんの。』

『何故。』

『伯が見へて誰も入れちや可けないつて有仰ましたから。』
『ア然だ』と吃りながら忘れて居た。

直ぐ引還して我家へ還る途上の心は、泥酔同様嫉妬の炎に本慥を失つて、譬へん方もなく愧かしい事を何の心もなく遣つた。今頃は乃公を笑つてゐるのだらう。伯と對坐に如徳風を

して前宵乃公に言つたのと同じ辭を言ふて居るのだ。己何うするかと忽ち二百圓の紙幣を取つて、

『餘り急に歸つたので枕金拂ふのを忘れた。即ち此に封じて置く。』

と書き添へて送つて遣つたが、我ながら餘りとしても賤しい所業を、今にも悔るに違ひないから、其避けん爲か、直ぐ家を出て、林子の所へ行くと、恰度着物を着て試る所對坐になると、我を慰めんとて、淫猥な哥を謠つて聞かす、杯耻も知らず、情もない所謂、それしやの好標本である。但し自分が露子を思つた様に、林子を思ふ人、在るかも知れんが、尠くとも自分には然思はれる。彼は金を無心した。興ると既う自分に用事なしなんで、自分は又歸つて來た。が露子からは返事が來て居らぬ。引續いて其翌日も逆上せ反つて一日を送つたは言はずもがなだが、

夜九時半見慣れぬ使が自分の昨日の手紙を入れた一封の書と貳百圓札を持って来た。其他何の口上もない。

『お前誰から頼まれて来たんだ』と問ふと、

『次の汽車で女中と一緒にブローギニへお出になる奥様で、汽車が出てから往けと有仰ました。』

聞きも敢へず飛ぶか如くに安丹街へ往くと、

『御新造様は二時に英吉利へ御發足でした』と家の者の返答。戀もなく恨もなし、今は我を巴里に引止める者失くなつて、自分も甚く疲勞が出て来た。恰度或友人が東洋へ旅立を爲やうといふ所だつたので、一緒に往きたい旨父へ言ふて遣ると、金も送つて来る。紹介状も添へて来た。萬事上背尾準備を急いで、凡そ十日の後、マルセイユを出帆し、アレキサンドリアに着くと、時々露子の許で逢つた公使館附の武官に逢つて、初めて

露子が危篤の由を開き知り、直ぐに手紙を遣つた返事が、即ち先刻御覽に入れた手紙、其をツローンで受取るが否、自分は引返して来たので、其先は此佐野百合子から貰つて来た日記を御覽になれば整然と解るんで、今申し上げた譯の註釋としては全く天下一品です。

(三十五)

涙に咽びつゝ、語り出でた長物語に疲れ果て、床しの露子が手づから認めた日記を我に渡してからは、考へんとてか眠らんとてか、双の手に額を抑へ、眼を閉ぢて沈としてゐたが、霎時すると睡眠に就いたと見えて、微なる鼾聲、尤も心は始終安まらぬので、物音がタリとすれば、忽ち覺めるのである。

扱我が讀んだ日記は即ち左の通り、一字一句増減せず。

十二月十五日

四三六

三四日前より病氣の處今朝は起きられ不申空接盛り氣分打沈み候ものぞ誰一人傍に看病してくれる人もなく唯御前様の事ばかり思詰り居申候只今御身は何處におはし候やらん巴里よりは遠き國に御出のよし人の話に承り候が御前様最早露子をお忘れに相成候かと心細くも被存候夫も御恨み不申上只々御無事に御榮え被下度私生涯只一度の仕合の折は御身の下され物といつまでも相忘れ申間敷候

いつやらの私のしわざ御申開き不致候ては此心済み不申此程手紙差上申置候得とも私の様な者の手紙はいつも作ると見られ可申死と申す神様の御辭添ひて遺言とならぬ中はなか御信用下さらぬ事と存候今日は餘程氣分悪しく以前よりわか死致す心得に候へば此度は助かり申間敷母も

第 二 十 五 章

肺病にて死去致候事故私の様なくらし方致し候てはいやでも其筋を引き可申に付今は覺悟致し申遣し候私もあの折の事逐一不申上候ては死に切れ不申若し御明し不申候は御前様御歸國の節又々御心懸りに遊ばされ候事と存じ候
尙私の辭の偽ならぬ證據の爲別紙之手紙封じ込置申候
父上御出の節は兩人とも仰天致候事其折私をなかと立去り候事御前様と父上との行き違ひなど一々未だに御忘れ無之事と存じ候
父上御着之翌日御身巴里へお出之留守中使の男父上様よりの手紙持参致し候其手紙別紙封じ置申候があらまは私へのお頼みにて其あくる日私に逢ひ御話しなされ度き御用有之候に付何とか工夫致し御前様を不在に致し申すようとりわけ此事は御前様に内々に致すべき旨御仰越し被遊候そ

格 堀

四三七

のあくる日是非共巴里へ御出向なさるべき様私申し張り候
が、これまた御めすれ無之事と存参らせし

御身御出ましの後一時間経たぬに父上御出に相成候、其節
私を御覽遊はされ候怖ろしき御顔つきはわざと申上げすい
とに角、父上様は昔かたぎのお考にて、園者と申せば、わけもわ
からねば人情もさく、金銀を作る器械のやうなものにて、何く
れとなく呉れる手を粉みぢんに喰ひ掻き動かせ働かせ生か
させてくれる人を情も見界もなく、粉にして了うものと思
ておられし様子に御座候、手紙は町噂に御認め遊ばされ候が、
御越の節はさるで打て變り押強く威張りかへり、おどす様な
調子に有之候まゝ、私も少し疝にさわり、人の家に候へば、少し
は御心得なされ度、私の身の上に付き、父上様よりいさゝかに
ても御口容れられる筈も無之、唯お前様に對し、普通ならぬ愛

ある故にこそ、御目にかゝる譯に候へば、少しはおつゝし、み被
下度旨申候處や、程かに御なり遊ばされ候得共、やはり私の
爲御前様の身をあやまらせる事ゆるしがたく、私のさりよう
よきは聞さしにはまされど、其さりようをよい事にして、あれ
程に金つかはせ望多き若き人の行末をあやまらせ候事許し
がたくと、切りに御仰相成申候

御前様の方に及び候より、餘計の金子は使はせぬ爲め、私に
出来る限りのぎせいは必ず致し居候趣、御得心の参るやう、賣
代致し物の受取、賈札など残らず御目に懸け、家財を賣拂ひて
借金を濟ませ、入費少く致し候て、御前様と所帯する決心、遂申
上、二人のなかの睦まじさ、御前様のおかげにて、地味な樂しき
くらしかたある事を覺へ候旨をも、お話致し候處、父上様と
とう御納得相成り、私の手を把り、初めの失禮をお詫に相成候

上

「此上は叱言でもなく、脅迫でもなく、唯々切に願ひ申度俵の爲、從來被成下候より、一層も二層も大きな犠牲被成下候様、是非共御願申度。」

と御仰出に相成候、私此まへおきには殆どふるへ上り申候、父上近々とお寄りに相成り、私の兩手を把りてやさしき調子に「我が言ふ事無理とのみ思ふて呉れまじく、さりながら、殘酷ながらも是非共せねばならぬ事、世間に随分ある例なる事篤と考へて貰ひ度し、眞に其許は感心、お前を爪弾きなどする婦人には、とても見られぬ俠氣あり、其れ見掛けての頼み賢きお前には解る事なるべく、人は情婦丈で持つ者でなし、第一一家といふものあり、世間の義理、われの務あり、色氣盛りの時代に繼いで、分別盛りの時代あり、其時分乘中へ出て、肩身の狭い思

すまじとならば、前以て眞面目な位地を作つて置かねばならず、俵は別に資産も無きに、お前の爲には母の遺した収入を棒に振る意、若し俵がお前の犠牲を受るとすれば、男の面目、其代りに相當の事爲ねばならず、併し世間といふもの、此犠牲を其様は解つて呉れまじく、つまりは我等家名が傷く障、從て壽太郎の心持は奈何様にもわれ、此犠牲は受けさせられぬ仕籠、世間の人は壽太郎がお前を愛して居るか、お前が又壽太郎を愛して居るか、乃至此愛が俵には幸福にて、お前には解脱になるか、其塵事、誰しも考へては呉れず、唯思ふは、有馬壽太郎は圍物からといふのは失禮ながら、是は世間の口實がれたと計り、其中何れ分別の時代が来るすれば、既う遅くはや離れられぬ、歎に繋がれて了ふた頃にて、其期に及びお前は何となさる盛は、過て老て了ひ、俵は出世の見込は無し、我等方では二人の子女

から奉行して貰ふ意に對んで居たのが一人減らされる譯になる。

「お前は尙若し景色は良し、將來は樂なもの、殊に破心な心算氣一つの奉行にて前の罪は掃済せやう。お前と一緒に居る半年の間といふもの、伴は我等を忘れて丁以四度も手紙を出したるに、一度も返事を書かず、乃公は死ぬ程の心配して居るに、伴は何も知らぬ道の道の上せ方。」

「從來の生活向を變へやうとの決心は奈何であるうが、伴は將來買替でなくてはならぬ身なれば、お前を救ふ事は能はず。お前を思ふて居るに相違はなけれど、將來が許さねば眞可哀想ながら一緒にする事はならず、又お前ととも此美しき景色が此塵世住居は許さぬ理然うなれば、伴は何となるべし。彼は賭博も打ち、又お前には言ふて居まいが、前後の考失ふて、乃公

が永年懸つて、娘が爲壽太郎の爲、又自分の老後の爲にとて貯蓄して置いた金の一部をお前に與り兼ねまじい場合であつた、乃公は夫迄知つて居る。一旦爲り掛けた事、此先又何時爲りともいはれまじ。

「お前は今伴の爲に寛濶な生活を思やうと爲されど、能く將來になつても昔戀しくなるやうな事なしと思ふか、從來伴を愛しては居なすつたが、此未來他の男を思入事はないと保證が出来るか、假令其は無にしても、戀の夢の時代に繼いで野心の時代が来た時分、お前の戀に伴の生涯を妨げながら、其はお前の力に何とも能ぬからとてお前は黙つて見て居られる事か、夫で心に苦みはあるまいか、是等を善く〜お考へなされ。お前は伴を思ふて居て下さる、まこと然なら證據を見せて貰ひたい證據、其見せる道は今の處唯一ツ、伴の將來の爲にお

前の戀を犠牲にするといふ事計、今迄別段不幸は無かつたが
早晩は必ず来る、而も乃公が思ふてゐるよりは大きなものか
も知れぬ例へば壽太郎が前のお前の男を、嫉妬の爲に憤らし
て、喧嘩して体が殺される、もし如惣事にでもなつて、此親父が
息子の生命の爲にお前に逢ひに来た時、我が顔を見るお前の
苦痛は抑甚廢物？

「未だ全然話は爲ぬのなれば一伍一部を言ふが、何故に乃公
が巴里へ来たかといふに、前にも言ふ通り、娘が一人ある、尙若
く、美しい、天使の様に、清い娘、此が戀をして同じく戀を生涯の
樂として居るを、委細俵の處へ言ふて遣したるに、お前に氣が
奪られて居て返事一本書さず、其も先づ良しとしようが、娘が
結婚する事となつた、娘は戀人の嫁になるのなれば、一日も早
う納めたいが一杯、併し先が名望家として此方も立派でなくて

はならずといふに、壽太郎奴が巴里での行狀、拍子悪く先方へ
聞ぬ先からは改まつた挨拶にて、壽太郎様が行狀をお改めな
さらぬ以上、縁談破談にするとの申込解りましたか、お前に對
して何一つ悪い事爲た事もあし、將來の樂を望む丈の權利は
有つて生れた娘、其將來を良く爲やうと悪く爲やうと、とんと
お前の手一つになる事、夫れを拒む權利があるか、情として拒
めるものか、露子、お前の戀にかけ、又お前の懺悔にかけ、老父が
願娘に幸を與て下され、としみよの御物がたり、私も兼々
思ひ居候が、今又父上の御辭により更に又彌動かしがたき眞
と相成候考を又茲に考へながら、物も不申只々泣入申候、父上
様の口まで幾度となくこみ上げながら、私へ氣を兼ね被下
御仰せなかりし事を、我自ら心の中にて申候、奈何にしても私
はやはり圓者にて、二人の戀にはよし奈何に深い仔細有之候

とも私の慾得づくとも見へ候外なかるべくありし昔の我が身を思へばかゝる行末を望むなどは以ての外の次第從來の身のこまし人の評判より見候へばとても續き可申受合はなりかねましき事うけひき居る譯合に御座候つゝまゝ私は只此上もなくお前様いとしく存じぬ。

父上が話ぶりの娘に御仰被下候様なりしと御話により清き高き心の私に起り候と仰に従ひ候はゞ父上の尊敬をも得後には恥度御前様よりも敬はれ可申など心付候につけ是迄知らぬ尊き誇りの思いたし父上只今は御前様の行末の爲私に御頼み遊ばされ候得ともやがては不思議な友達として妹御様の御祈禱の中へ私の名をも加へ被下候様御仰付可被下事かと存候得ばはや私は生れ替り候心持にて自分ながら尊き者に存じ申候。

其時の嬉しさにかられて行末恥度左様に相なるべき事と堅く信じ候まゝ御前様との嬉しさ所帯の日も相忘れ申候。私は涙を拭ひながら父上に向ひ「御尋申度貴君様には私が壽太郎様を慕ひ居候事をお疑には相成不申や」と御尋申上候處「儘かに」とお仰せに付重ねて「慾得離れて居り候か」相たしかめ候に「左様」との御答「私此戀を望とも生涯の樂とも一生の解脱とも爲てゐた事御信用下さるべきや」と念押し申候に「勿論確實に信じます」と被申候まゝ「夫ならば貴君のお嬢様を接吻遊ばされ様に一度接吻して下され度如懸純潔な接吻を爲て戴けば恥度私の戀と聞ふ丈の力も付き可申御子息様は一週間内には是非お歸りに可相成尤も少時はお慰まざるべきも末の爲に良いのは勿論」と申候に父上は「見上げた兒ぢや」とて頼に接吻遊ばされ「神様が必ずお報下さるに

極つて居るが夫で伴が直るか知ら」と御掛念に付き「夫れは
丈夫、屹度私をお憎みになりまする」と是れより私の爲めにも
お前様の爲めにも越すに越されぬ鐵の門を造らんと彌取掛
り申候。

おてるへ手紙を遣はし、N伯の仰に従ひ可申に付早速おて
ると伯爵と三人にて夕飯たべ申度よし、伯へ通じ可申様相認
め封のまゝ、文言は御しらせ不申、巴里へお歸りの上はおてる
へ御届け被下度旨お頼致し候處、手紙の用向お尋に付、御子息
の件とのみ申上候ひしに、父上様又々御接吻被下、私の過去の
罪の洗禮の如く、感謝の涙二滴はら〜と額に御そゝぎ被下
候、此時は私の心持、他し男に被重ねを思ひ定めながら、此罪に
て却て一切の罪を消し可申と思へば自分ながらなかく見
上げたる女の様に存じ申候。

御前様いつぞや父上は世界中にて一番正直の方と御仰被
遊候が、成程御尤もの御はなしとつく〜思ひなされ申候。

父上様は馬車にて直様巴里へ御歸りに相成候が、やッぱり
私は女にて候ひしよ、御前様御歸りの節は唯涙にせきあへず、
せめて心かへさゝりし丈を上出来と存申候。

今日病氣にて床に臥し、死なねば此床は離れまじと思ひつ
つ、あの時の行正しかりしかをひとり我身に尋ね居申候。

二人の別るゝ最後の愈近づきし折の私が心持、御前様御わ
かりにならぬ事ながら、眼の前に私のありさまはよく御存知
に御座候、はや父上の御助も無之候まゝ、やがては御前様に憎
まれ賤まれ候かと思へば、怖しき堪へがたく、一切打明申さん
かと、口まで出かけ候事も有之、とても私の力にては及び不申
候まゝ、心に神様を念じ申候、是は御前様も信とは御思召被下

間敷さりながら神様まごゝろを御受け下されしと相見え、御
祈致し候力を下され申候。

伯と夜食致居候中にもひとりにては得致し不申、とても爲
おうせる丈の勇氣なきかと切りに心配致し、或は又自分が何
致すつもりやをも知らぬ事も有之候、後藤露子が新に男もつ
とて其迄に心を苦しめ候とは、誰しも思はぬ事に候が、私は唯
無暗に御酒を戴き、前後打忘れ候處、翌日伯の側に打臥し居り
驚き覺めて泣き出し申候。

右は聊か包まぬ處に御座候間、御判断被下、其時以來御前様
の御所業一切御許し申上げ候通り、私をも御許し被下度偏に
念じ上參らせ候。

二十六

其翌る日の出来事は御前様も御存知に御座候が、御別れ申

してより私の悲しみ苦しみ申候故は御前様御存知なりがた
く、御推諒もなり不申候。其後父上御前様を御伴れ歸り相成候
趣承り候得共、永くは私を離れて御辛抱なされ候事相成りが
たく候段よく承知致し居候まゝ、いつぞやシャンゼリゼ
ーにて御目にかゝり候節、いとう困り入申候得共、さしてびマ
くりは致し不申候。

之より毎日新しき苦みを蒙り候が、一層の事、これもお前様尙
私を御思召被下候證據にも有之、且は事の仔細御分りの節は
餘計に御苦め被遊ゆ丈、又餘計に私をゑらい者と御思召被下
候事と存じ、却て悦びこらへ居申候。たゞし悦ぶと申候とも御
訝り被下間敷、御前様の戀のお蔭にて私の心は貴き事に熱心
する様相成居候事御承知被下度候。たゞし初めよりあの様に
強く心丈夫なりしには無之、御身への犠牲の爲とて他し男に

まみへ候ひしより、御前様お歸りまでには随分日數も有之候間、目くらともつんばうともならん爲、又あまりの心の苦みに氣狂と相成不申候機身を捨鉢に致し、夜會ふるまひは必ず出掛候事おてるより御聞取の通に候、其夜より不養生致し一日も早く死にたく念じ居り候ひしが、其願も今は愜ふらしく、健康日一日と悪く相成り、おてるを御許へ差出し候頃は、はや軀も精神も疲れ果たる末に御坐し、其折私が尙御前様を慕ひ居る最後のしるしに對し、御前様の被遊候事はこゝに不申上御立腹の餘りとや劇しさに、今死なん身を遁匿れ申候が、思へば戀の一夜を求められし折、よう御斷不致假令一時なりとも今を昔に返され候事と心得候淺はかなさ耻しく、御前様の遊ばし候事、千萬御尤に有之一晩の枕金那程に頂戴致候事初めてに御座候。

其後は私萬事打棄候處、林子様私に代りN伯にかゝり合なされ、私がN伯を棄てしはれを伯に御話と被成候様承居申候。恰度G伯、ろんどんにおはし候ひしが、あの方は私共の様な女にする戀はよい程に深入し、面白いなぐさみと心得切れた後、も別段憎まず、やはり女と友達づきあひをする實の方にて、心は底まで明さずとも、財産は底をはたいて下さる殿様流の方とて、直ぐに此人と思ひ付き、倫敦へ参り候處、親切に御もてなし被下候が、當時伯は上流社會の婦人と御關係有之候ひしため、私との關係相知れ候ては甚だ御迷惑の仕誼とて、親近の方へ御紹介被下候處、此方にて私の爲、晩さん會御催被下、其夜より其中のある紳士の宅へ伴れ行かれ申候。

考へ候とも此外の致方無之、もし私自害致候は、要らざる事に御悔ませ申參らせ、御尋出度かるべき御生涯を妨げ可申。

殊に又是程死目に近寄りながら、自害して何の役にも立ち申間敷と存じ、つい左様な旅の恥まで相晒し申候。

かくて靈魂なき軀體と相成、心なき物として、禽獸の様に少時相暮し候後、巴里へ立歸り、御前様相尋ね候て、初めて長の旅路に御出立相成候よし承候。致方なき儘公爵との撚を戻さんと致し候へども、既う餘り御氣嫌損じ居候爲、何とも致方無之老人と申す者は、やがて死ぬと思ひ候まゝ、兎角短氣なるには困入申候。一方にはからだは日毎に弱りはて、我身にも是迄ついで知らぬ迄蒼さめ、瘡さらばひ、打ふさぎ申候。戀を買ふ人、受取る前に品物相しらべ申候事なれば、巴里にはもつと壯健にて、私の様やせこけ居らぬ女澤山有之候まゝ、私は世間よりすてられ申候。是れが昨日迄の一任一任に御坐し。

只今は病氣も危篤に有之一厘の善もなきに、掛取は容赦な

く、執念深く参り候まゝ、公爵へ手紙をやり無心申遣候。さりながら返事参るべきや、甚だ心許なく、御前様何故なれば巴里にはおはさぬ事かと、誠にノノ情なく、若し當地に御はし候は、御越相叶ふべく、さらば私病氣も是迄重りは致すまじきに、何ばうか殘おはく存じ。

十二月二十日

今日天氣すさまじく、雪降に候が、不相變私一人にて淋敷打臥申候。此三日の間熱甚しく、手紙書く事も叶はぬ有様に有之候處、今日は聊か輕み申候行く水にかく敷の夫よりは、かなき望ながら、毎日ノノ今日も御前様より手紙参り候かと、相樂しみ居候得共、更にノノ参り不申、多分は妾存命中には参らぬ事なるべくと存じ候。いつまでも許さじとはさても男は氣強き

もの公爵よりは返事無之候。

四四六

おてるは又々質を置き居申候。

朝より晩まで血を咯かぬ時としては無之、御前様常地におはし、私のおま御覽被下候事相叶候は、如何にか哀れに御思召候やらん併しながら御前様はあたくかな處に御在遊ばし、私の様に胸に氷の冬なき事誠に、結帯に御座候、私今日少時起き居り、窓掛の間より、今は少しもかゝりあひなき巴里の有様を見下し申候處、中には知合の顔も通行致候が、孰れも悦ばしげに急ぎ足にて行き過ぎ、誰一人目を舉げて私の方を見る人も無之、乍併若き方四五人御尋被下候方も有之候、以前私病氣の節、御前様は未だ御知合にも無之、唯初めて御眼に照り候夜失禮致候事故、御憎しみこそわれ、其他何事あるべくもあらぬを、毎日御見舞に御越被下、其後半歳の間世帯致し、女心に叶

掃

廻

ふ限り、女心に出来候限り、御前様を戀ひ参らせしを、今は遠き空におはし、私をのろひ居られ候かと思へば、奈何にしても情なく生ある中一口だに御前様より慰めの言承られ不申候事、今生後世の恨に御座候、さりながら御前様私を御棄被遊居候もほんの一時の拍子、若し巴里におはし候は、決して病の床の傍は御離れなさるまじくと、ひとり慰め居申候。

十二月二十五日

毎日筆とり候事相成不申由醫師より申付られしが、思出し候程軀體の熱相高まり申ひ、然る處昨日受取の手紙により、大きに力とりかへし申候、但し封入の物も助けには相成候事いふまでもなく候へ共、何より其文言のおかげにて生き返り申候、すなはち昨日父上より被下候御手紙次の通に御座候。

掃 廻

四四七

「只今病氣の趣拜承仕候。若し自分巴里に罷在候は、直接御尋可申上。又壽太郎當地に罷在候は、早々可差遣之處、私は差廻有之常地を離れ難く、伴は六百里彼方に罷在候事とて残念。あから不果其意、誠に御病氣之由承り、心配に堪へ不申、何卒々々一日も早く御全快被下候様偏に祈上申候。」

知人M.Hと申者御尋ね可申上、御面會願上候、聊か用向相頼申候が、委細は御面會被下候は、相分り可申候早々。」

父上は誠に見上げたる方に有之、よく父上を御いとしみなさるべく、かほどいとしむ丈の甲斐ある方世間には稀に御座候。父上御署名の手紙は名醫の處方書百通にも勝り、病氣にさゝめ相見え申候。

今朝M.H様御越相成り、此使には随分御困りの様に見受申候。御用は勿論父上よりの仰越にて、金子壹千貳百圓御持參被

下候事に候が、最初私御辭退致候得共、M.H様の御話にては、父上此度は此丈に致し、此次何程にても、入用丈相渡す様申越相成居候位ゆへ、若し辭退致しては、御立腹なさるべくとの事に付、御前様父上よりの下されものなれば、まんざら物貰ひ同然にも無之と存じ頂戴仕り候。御前様御歸りの節、私死去致し居り候は、父上様の事に付、私が認居候事、御目に掛け被下度、私之を認め候折、おれほど御懇切の御手紙被下候御志を思ひ、涙に咽び候ては、父上の御幸福を神に祈りたるよし、おつたへ被下度念じ上り。

一月四日

此日頃言はれぬ苦みを致申候が、からだも是程迄こたへられるものとは存じ申さし、計りに御座候。思へば怖ろしき昔

にて只今重く其のむくひを受け申候。毎晩誰とは知らず、私の
側に番をする人有之。私は胸を抑へられ候様にて呼吸なりが
たく、死際の命、たゞ眼まひと咳とのみに御座候。

食堂には知人より送りくれ候果物、其外いろく物の一杯
にひが、其中には全快の上私の変を得んとするも有之。若し私
病氣のいはれを承知致し候は、驚きおそれてにげて行き可
申。おてるは例により此おくりものを持行き、正月の遣ひ物に
致居候。

霜おきはじめ候が、天氣打續き候は、四五日出あるまで
宜敷旨お醫者様申くれ候。

一月八日

昨日馬車にて出掛申候處、上天氣にて、シャンゼリゼーは人

一杯、誠に初春の色めでたく、わたりの物皆お祭の様に見へ、是
れ迄日の光に是程の秋、是ほどの慰宿るものとは存じ寄り申
さし、計に候。

見知合の人は大抵皆出會候が、皆嬉しうに、樂しみに心奪
はれ居候。さても幸福なる人の、其幸福あるを知らぬ事多きは
今更ながらおどろき入申候。林子様、耳伯よりもらひし美しさ
馬車にて通りすがりに、眼付にて私をからかふ様子に見受候
が、今は私其様の事願ぢやく致し申さぬ事御存知なき事と相
見え申候。以前より見知居る可愛らしい男の人、私と近付にな
らんと切りに望み居る友人の方と一緒に、夕げ喰たければと
て御頼みに相成候まゝ、私淋しく打笑ひ、熱に燃え居る手を差
出候に、其人のおどろきたる顔付、是迄見たる事無きおかしさ
に有之候。

四時に立歸り候て、夜食はおいしく戴き申候が、出掛る方た
しかに病氣の爲に宜敷、此調子で全快致候事ならば、いかに嬉
しく候やらん、ゆうべは心の淋しさの爲、薄くらき病の床に、唯
一時も早う死んとのみ願ひ候者も、いき／＼した世間を見、他
の人の幸福なさまを見ては、さすがに矢張り生延び度相成申
候。

一月十日

本ぶくの望は全く夢にて、又病の床に歸り、身は焼くやうに
有之、もう行先も永かるまじく、以前は人も那れ迄に金をかけ
くれ候此身を、只今人に捧げんと申候は、い、そもや奈何ほどに
買ふてくれ可申哉、思へばおかしなものに御座候。

私共は前世によく／＼の罪を作りし事と存候、さなくば神

様只今ある限りの苦みをおさせなさるゝ事に候へば、來世は
まじくと結構なく、極樂淨土へ行かれる事と存申候。

一月十二日

引續き病氣にてよい目は少しも無之候。

昨日N伯なにかしかのお金御遣しなされ候得共、御返し申
候。御前様の御不在も、皆那の方故に候へば、那の人よりは何物
も貰ふまじくと、かたく相定め居申候。

思へばブーデバルにての樂しさ、抑へても戀しく、今何處へ
参り申候やらん。

若し運よく一命助かりて、此室を出でられ候は、順禮と相
成り、一緒に所帯致せし家へ参るべく、但し死ぬ迄其家は離れ
まじく候。

明日又御前様へ手紙認められ可申哉神も知しめすまじく候。

四五四

摺

一月廿五日

此間より十一日の間、毎晩寝られ不申、息つまり候て、いづも
く、今死んで行く事と存申候。醫者様は決して筆とるまじく、
かたぐ、御といひ相成申候へ共、看病致居候佐野百合子、私に
此文を書かせくれ申候。どうしても御前様私死ぬ前に御歸り
下さるまじくや、行く末の末かけて、二人が中は切れたまゝに
有之べくや、若し御前様御越被下候は、私は手もなく全快致
すこと、存候。さりながら生きて何の甲斐もなき身、さて御前
様には御目もうじ致度、さりとてさらく、命おしくも無し、二
つに打迷ひ自分で自分が分り不申候。

摺

一月二十八日

今朝おびたいしき物音に目覺候へば、私室にやすみ居りし
百合子、食堂へかけ行き申候。何事ぞと聞居候に、けんどんな人
の聲々、百合子が何やらいろく、争ひ居聲も聞へ候へど、更に
甲斐なく、泣きながら室へ参り候が、聞けば人々差押に参りし
由に候。詮方なく其まゝ、打捨置かせしに、役人帽子のまゝ、私室
へ参り、抽斗を抜き、見る物は一々書きとめ、こゝに死に掛り居
る女ありとも知らぬ顔に御座候。尤も歸り際に、九日の中に、訴
へ出てよろしき由申のこし候へども、番人一人遣して歸り候
思へば、我身は奈何相成可申哉。此有様目のあたり見てより、加
減にはかに悪く相成申候。おてるは父上の御友達へ参り、お金
を無心致さんと申候へ共、私これは決してさせ不申候。

第 二 十 六 章

摺

四五五

御前様の御手紙今朝拜し、まことに待兼居たる事とて嬉しく嬉しく拜し申候。私事御返事丁度御前様へ届き申可哉。御前様御歸り被遊存生中に御目にかゝれ可申哉。とに角今日は嬉しき日にて、此六週間のくるしき儘さ、一時に相忘申候。御前様へ差上る返事を思へば、悲しくも思はれ候へど、今日の御文にて病氣もよろしき様存申候。

とにかく誰とてもいつもく不幸計りにては無之候。

私幸に命を拾ひ、御身御歸國に相成、樂しき春のうらゝかさ、に御身不相變私を御いとしみ被下。又昨年の所帯を續けられ候様ならばと、時折思ひては悦びはかなみ申候。思へばおろかな心にて、かゝる夢を見る身は、其思ひ書す筆とる方さへ、今は早や無之候ものぞ。

行末如何相成候とも、私御前様こそは善くもく御慕ひ申

上り、私若し御身の愛を想起し候て、力だのみに致し、又御歸り被遊いて私の傍に御坐り可被下など、おだな望をもつ事無之候は、疾くの昔みまかり居可申筈に御座候。

二月四日

G伯御かゝりわいの女他し男に見かへしたる爲伯爵當地へ御歸りに相成候が、いたくよさ居られ候。餘程其女御執心の事とて逐一私へ御話に相成候。御氣の毒にも此頃手元おまり宜しからぬ中を、私の借金御拂被下差押を解いて被下候。私も御前様之事話致候處、御前様御歸國之上は私の事話し致べき由御約束なし被下候。此間、私が前に伯と關係有りし事は忘れ居り、伯も可成忘れさせる様御仕向被成候。誠に那の方はよい友達と嬉しく存居申候。

公爵より時々御使にて見舞被下、今朝は自身御出に相成ひが那丈の年にて奈何して死なずに居られし事やら不思議の至りに御座候。凡そ三時間計御在に相成候が何にも仰せられず、唯私の青い顔御覽の時、大粒の涙はらりと御こぼしに相成候が、屹度御嬢様の御死去を思ひ出しての事なるべく、いはば御嬢様の死際二度御覽に相成る譯合に御座候。背は屈み頭はうなだれ、眼は光なく、老の重荷と悲とが衰へたるからだへ二重の重みとなりてかゝり居候有さま見ぐるしく、私の傍へは御立寄不相成候得共、内々私の病氣御悦の様子にて、若き私の苦みてはや死にかゝり居候を、公は尙とにかくも其足に立ち居らるゝを、ほこり居られし様子に見受申候。

又天氣悪う相成り、誰一人見舞に参り候人も無く、百合子は出来る丈介抱致吳候へども、おてるへは是迄の様手當致兼候

まゝ何かと用向をつくるひ、参り不申候。

醫師は氣休めを申候得共、日に悪うなり増りゆくしるし色々有之、もう最後も近く相成候事と覺悟相極め申候。只今にては父上の御仰に従ひ参らせたる事残りおしき様にて、那の時私の壽命今年よりなき事相分り居り、御前様の往末相妨げ候共、はんの一年と存候は、其一年の間は、せめて御前様と相暮し可申よし、何誰様の仰にても此願奈何にしてもおさへ申間敷、さらば死ぬに致せ、御前様の手によりて淨土へ参られ申すべきを誠に、殘念に御座候。さう乍ら二人一緒に相暮し居候は、私もさう早くは死ぬ様の事萬々無之事と存候。詮方なく今は神様のお思召に打任せ申候。

二月五日

早速御越被下度候。今はの御願、今日、只今すぐ、御越可被下候。

只今、私は息引取り申候。昨夜は長く、はてしなく、あける事なき夜の様思はれ候て、我家に明かすは餘りに怖敷奈處へでも参り明し度と存じたる計り、哀れの一夜相過し申候。今朝公爵御出に相成候。死神がふと見忘れたるらしき此方の顔拜し候に、却て私の壽命をちいめる様な心持致し候。

焼ける程熱は有之候ひしが、無理に着物着せて貰ひ、ポードツイルへ参り候。顔色まるで死人同然に有之候まゝ、百合子頬紅をさしくれ申候。わざと掛は御前様と初めて近付に相成し所に致し、其折御前様御在之所には、田舎者参り居り、役者の申すつまつらぬ事に仰々しく打笑ひ居り候ひしも、其方はかり見遣り申候。人々に連れ歸られし折は、半分は死で了ひ居り、夜どうし咳を致し、血を吐き申候。今日は物言ふ事も出来不申、手も大方動き兼ね候。噫、只今、今はや息引取申候。覺悟の前の事ながら

只今の苦より尙つらき苦あるかと存候へば、噫、さては、苦しく、若し又……

此次に一行ばかり、露子の筆に書かれた文字は讀む事が能ぬ。此以後は佐野百合子の書いたものである。

二月十八日

有馬様参る。

露子様強めて劇場へ参られ候日より、一日々々悪く相成も、う聲も出ず、手足も利き不申。どの位の苦やら、とても私筆にも及び不申。こんな事には場馴居候まゝ、朝から晩まで、おそればかり居申様。

御前様御出被下候は、どの位力になり、嬉しく候やらん。露子様いつも熱にうかされ、物言はれる時に申され候事は、唯御前様の御名ばかりに候。

お醫者様私へ迄被仰候には、露子様行末永くは無之由斯様に相成候てより、公爵も御出無之、もう見るに見られぬ由、お醫者様へ御話被成たる趣に御座候。

おてるはまことに憎き人にて、從來大かた露子様のおかけにてくらしながら、此頃手に餘る借金をこしらへ、露子様より拂ふて貰ふつもの處、もう頼みにならぬ事と見て取り候より、尋ねにも参り不申、其外誰も彼も露子様をすて申候。G伯は借金に責められ、倫敦へ御歸りに相成申候が、當地御立の節、又々金子御送り被下、凡て出来る丈の事は爲て下され候が、掛取又々詰掛け、家財一切差押へ、只今は一日も早く賣拂はん爲、露子様の死去を待ち居候有様、誠に齒がゆく憎らしく存申候。

私事借金質に置ても、これ取止めんと致候へ共、役人申す様よし、此は片附候共、又其次に差押可有之に付、とてもだめのよ

し申し聞かせ候、どうせ助からぬ命に候へば、露子様がちつとも逢ひたいとも御思無之、向ふの方でも氣にかけてもくれぬ様、親類の人に、何一つでも遺すよりは、いッそ賣られる方まだしもと存申候。さて、今どれ程おはれの中に、露子様が息引取り可申哉、御前様とても御思付被成間敷、昨日などは無いといへば、誠に一文なし、皿も、珠も、肩掛も、何もかも、皆質に入居、殘れるは賣り又は差押と相成居候有さま、泣くにも泣かれ不申露子様、まだ是等の事相わかり居候まゝ、からだから心から、四苦八苦の責苦に候、御前様御いとしがり被成候顔ながら、今日もし御覽被成候は、御見知り被成間敷、むごい程瘠せ、荒へ蒼さめ果て居申候、露子様手紙書く事叶はぬ様におなりの節は、私相認可申との約束により、只今露子様の目の前にて御認申候が、眼は私の方へ向けながら、私の顔を見る事は無之、涙の爲

ではなく、今に來る死神の雲におははれ、もう目も見えぬ有様に御坐候。さうながら御前様への手紙認め候時は、かすかに笑ふなど、心は唯々御前様の事ばかりに候段、私保證致申候。戸が開く度、露子様の眼は輝き、御前様御越かと悦び申候へ共、他の人なる由わかり候へば、またもとの情無い顔と相成、冷かな汗にじみ出で候さま、傍に見る私の心持御察被下度候。

二月十九日よなか

壽太郎様、今日は何たる悪日に御座候哉。今朝露子様硬くなりかけ候處、お醫者様血を出し候て、しばらく口利かる、様に相成申候。醫者は露子様に坊様を迎へ面會可致様申候處、露子様直ぐ承知なされ、お醫者様自身お寺へ参り申候。此間露子様私を床へ御呼寄せ被成、戸柵を開けさせ、手眞似にて帽子と

一又付の袴を出させ、さて小さな聲にて

「懺悔濟み次第直ぐ死ぬべければ、死に際のお頼、是着せて葬禮を、よひつゝ涙ながらに私に接吻し

「今物が言へる。併し、物言ふと息が詰る、息が詰る。風、風」と絶入るらしき様子に、私も涙に咽びつゝ、窓をあけ候が、やがて坊様参り候。私出迎へ候處、いやがられはせぬかといふ顔に、たゞすみ居候まゝ、御遠慮なく御入可被下よし申候處、御這入に相成り、しばらくにて御出ましの時私に向ひ、

「那方は罪人として御生活なされたる身ながら、基督教徒として立派に御死去になります。」と申され候。しばらくの後、四人讚美歌をうたふ子供をつれ、十字架をさし、前には神の近付き給ふを知らず如く、鈴打鳴らしつゝ、坊様又参られ三人にて寢室へ御這入りに相成候。以前には此室にて幾度となく

異な語も言ひつ言はれつせられし處ながら、只今は尊き御寺
同然尊き淨き所に御坐候。

私は跪きてお祈り致し申候。唯今日に見る哀れの心持何時
まで心に殘るべくや存知不申候得共、私の番に廻り合はせ候
迄は、これはどわはれの心持を、ひとく起させ候もの、人の世に
又と有りとは存し不申候。

坊様は病人の手足と額に尊き油うち注ぎ、短き御祈禱とあ
へ候が、露子様最早充分覺悟なされ被居候。神様もし存生中の
苦みと死際のおこそかさを御覽相成候は、露子様はきつと
極樂淨土へ參られ可申候。

其時より一言もお利にならず、又動きもなされず候まゝ、私
は最早息絶えしかと驚き候事幾度と數知れ不申、近寄り候へ
ば、苦しげにいさする聲聞うるに、漸う胸なでおろし申候。

二月二十日午後五時

萬事はや望たえ申候。

露子様式時頃臨終被遊候、其泣聲のわはれさ、いかなお祖師
様も是迄の苦は被遊間敷候。神の方へと飛び去る生命の繩を
取り留んとする様、二三度も寢床の上にもちやんと座り直られ
候すがた、目も當てられぬ様に覺え候。

又二三度お前様の名を御呼びあされ候が、其よりもう一言
もなく、全く疲れて床に倒れ、涙のみ眼より溢れ候が、はやこと
きれ申候。

私傍へ近寄り、名を呼び候へども、返事無之候まゝ、所詮とあ
きらめ、眼をとちさせ、額に接吻致候。露子様、私若し尊き婦人
にて、我が接吻にて御身を神にすゝめ得る身に候はんには、い

かに互に嬉しがるべきをと、つぐ／＼悔しく存じ申候。

扱て遺言の通り着物を更め、お寺へ参り、坊様を頼み置き、ば

だいの爲蠟燭二本ともし一時間祈禱致申候。

露子様の残りの金は皆貧乏人へ遣し申候。

佛の道よくは存知不申候へ共、神も佛も私の涙が真心より

出で、私の祈禱は誠をこめ、私の施しは實意なりし事、定めし御

存知の事なるべく、年若く、美しくして、其傍に眼を閉ぢさせ、經

帷子着せかけてくるゝ人、唯私一人にて、誰一人泣く人もなく

死に往き候事なれば、神様も屹度御憐み可被下事と存じ。

二月二十二日

今日葬式致候處、露子様の知合澤山會堂迄参り、其中には眞
底より泣いてくれしも有之候が、棺がモントートルへ向ひ

候折は、一緒に参り候もの、たつた男二人、能々倫敦より御越の
G伯と、輿に乗りし公爵とに御座候。

私昨日以來廿四時間何にもたべ不申候まゝ、お夏殿私の爲
に御飯こしらへくれ候得共、手を付け不申、淋しげな燈の下、涙
にくれつゝ、此手紙相認申候。

露子様の命自身の有にこれ無かりしと同様、私の生命も同
断に付、今日のおはれの思を長くはよう保ち不申、もし御前様
御歸りまでに日數たち候は、おはれさ其まゝに申上候事む
づかしくと存じ、事起り候其場にてかくは書きのこし上げ参
らせ候。

三十七

『お續になりましたか』と有馬は自分が手紙を見通したのを
見ると尋ねるので、

「此が眞箇なら餘程貴君御苦みだつたでせう。」

「父から手紙で、其は眞實だつて言て寄りました。」

有時哀れな運命を話し合ふて、自分は些と休む爲に歸つて来た。

有馬は尙陰氣ではあつたが少し此話をしてから氣が霽れたものらしく、間もなく全快したので、兩人打連れておると百合子を訪れた。

此時おてるは身代限を爲て居たので、自分等に向ては露子の爲だと啣して居た。露子が病氣の間約束手形で莫大の金を貸したが、素より自分に拂ふ丈の力はなし、露子は拂はずに死んで了つたので、切て受取證でもあれば破産の手續に加はる事も能たのだが、其も無かつたので負擔つて立つたとの話。此作話はおてるが其手元不如意の辯解として到る處觸れ

て廻る奴なんで、有馬は勿論眞實には信ないが、露子の交際つた人を敬ふ心から眞實にしたやうな顔をして、到頭五百圓札一枚呉れて遣つた。

次に百合子を訪ふと、其友を思出して、誠の涙を滌ぎつゝ、眼のあたり見たあはれの状を詳しく話してくれた。

最後に露子の墓へ行たが、春の初の日の光が木の芽を温めて柔かに輝いてゐる。

有馬に残つた一つの義務、夫は父の所へ歸る事で、自分に同道して貰いたい旨を頼むので、伴立て〇に着くと父といふ人は、話の様子で略自分の想つて居た通の人物、背丈の高い、品格の好い、親切げな人で、情愛の涙を以て、壽太郎氏を迎へ、さも懐かしげに我手を握つた。少時居る中、父其人の心の中には、子を思ふ心が何よりな旨を明かに見る事が能た。娘妙子嬢は曇り

無き眼と引締つた口に、氣高い考のみを懐くを示し、尊い淨い言葉ばかりを口にすることを現はしてゐる。有聲に年齢若く浮世の塵に染まぬ丈に、遊き巴里の空では、おはれ一人の圍者が、其名の清きを得んが爲に、一生の幸福を犠牲にした愁歎場など、夢にも知らず、唯嬌然な笑を以て兄を迎へたので。

心の療治を得ん爲に歸つた壽太郎氏を二人の待つ事最も懇で、用意の到らぬ際もなく、誠羨ましい家庭で、自分も暫時歸るを忘れたが、ざりとて何時迄止る譯にも往かず、聽て歸つて茲に聞いた其儘を筆にする。で作に一つとして褒められる所は、あるまいが、唯一つ誇るべき點は、即、眞實在つた事だといふ一事である。

自分は此譚を爲たからとて、凡て露子の様な婦人は、如恁事を能くすると言ふのではない。夫は決して出来ない事だが、自

分はかゝる人の中、或一人は一生、中極眞面目な戀を覺え、之が爲に苦み、之が爲に死だといふ事を見出したので、唯讀者に自分の聞いた儘を話す計、之が自分の義務であつたので、素より惡徳を頌する者ではないけれど、尊き悲歎の聲を祈禱の中に聞く時は、何時でも悦んで之を世に傳へるに躊躇しなす。

再び言ふ露子の譚は例外である。若し之が例外でなかつたなら、書く丈の價値は素より無かつたのである。

(天尾)

明明明明明
 治治治治治
 三三三三三
 十十十十十
 六六六六六
 年年年年年
 十七六六五五
 一月月月月
 月二十四一
 五十五二
 日日日日日
 四三再再發印
 版版版版
 發發發發
 行行行行

定價金八十五錢



譯者

長田忠一

東京市牛込區若松町四十一番地

發行者

荒川信賢

東京市小石川區關口町二百番地

印刷者

石井要藏

東京市神田區三河町二丁目十四番地

印刷所

合資會社丸利商會

東京市神田區三河町二丁目十四番地

東京府豐多摩郡戶塚村六百四十七番地

發行所

早稻田大學出版部

電話番町三百七十四番

近刊豫告

佛國文豪 ヴクトル、ユゴー原作
紅葉 尾崎徳太郎譯

小説 鐘樓守

全二冊 紙數約一千頁
三色版コロタイプ
印刷數葉挿入

これ十九世紀五大傑作中の一位にある一大雄篇にして嘗て歐米の文壇を震動せしめたる文豪
ユゴーが心血を費いで筆にせる史的且つ情的小説 ノートルダム、ド、パリ―なり蓋し原著者二代の大作家
と認めらる尾崎紅葉氏病を推して畢生の譯筆を此大作に染む其眞價歟とするを要せず世界的大文豪が著作の如何を窺はむとする者譯者が織美流麗の文を知らんとする者共に發行の日を待て一本を座右に供へらるべし

發行所

東京牛込

早稻田大學出版部

發賣所

東京日本橋區
本町三丁目

博文館

明治三十六年九月改正

出版圖書目錄

早稻田大學出版部

早稲田叢書出版の趣旨

按ずるに學問は何れの國に於ても自國の語を以て爲すべき者なり現に英人は英語を以て佛人は佛語を以て獨逸人は獨逸語を以て學問を爲しつゝあるは皆を俟たず譯つて我國今日迄の成行を見るに時勢は此普通の道を履むを許さず學に志す者其目的を達するの手段として先他國の語を學び然る後其語を以て著述せられたる書籍により研究せざる可らざりしなり抑し如何なる學問を問はず其種與を窺はんとする者は自國の語によりて研究するのみを以て満足せず他の國語をも學習して研究の範圍を擴むるは固より必要なれども當初より外國の語に依らざる可らずとせば當に不便の少からざるのみならず弊害も亦極めて多し一言以て之を述べば斯の如き有様にては學問の獨立なるを得得期す可らず我が早稲田大學は元來この不便を消滅せしめこの弊害を救はんが爲めに起り専ら邦語を以て政治經濟法律文學の諸科を授け而て其二十年間の經驗は吾人をして以下の如き斷言を爲すを得しむ曰く邦語を以て専門學を教授するの結果は外國語を以てするに比し寧ろ劣ること無きのみならず反つて良好なり而して外國語を學ぶが爲に費すべき勞苦と歳月とは固より之を省くを得と然れども邦語教育は教場教育なり修業者一旦教場若くは講義録を離れて別に研究を爲さんとするに當ては彼の參考書なる者大抵單行文字にして邦語を以て編まれたるもの殆んど有る無しこれ皆學問の進歩に關する二大缺典にあらざるや思ふにこれを補ふの途他無し先達の學者著述を著むると共に諸外國の名著を翻譯して之を紹介するにあらん是れ我早稲田大學が政治經濟法律に關する著述及翻譯書を出版するの一大理由なり然れども政治經濟法律に關する著譯書出版の趣意は以上述べたるに止まらず今日日新進歩の時勢に於て世人一般に政治經濟法律の如き社會に密接の關係ある學問上の知識を積蓄するの必要あり我早稲田大學こゝに思ふ所あるが故に彼の歐米に行はるる大學普及事業の制に倣ひ或は講義録を發行し或は講義を地方に開きて斯學の普及を謀ることを怠らず左ればこの著譯書出版の舉の如きも當に世間學生諸氏の便益を増さんが爲めのみならず又廣く大方の士君子に處世の指南車を供給せんが爲なり世間活潑篤學の士等に微意の在る所を酌みてこの舉に賛成せられんことを切望す

泰西の諸著述を翻譯するは固より新奇の事業にあらざる然れども從來の翻譯書中其の或者は既に陳腐にして參考と爲すに足らず或者は翻譯社體にして解讀し難きものあり本校こゝに觀る所あるが故に原書を選擇するに當り其著述の價值を精査せるは勿論又成る可く新著述を擇べり翻譯は正確ならんことを勉め且つ平易明瞭を旨とせり其當否に就ては著名の翻譯者責を負ふのみならず本校も亦責任を任せん

早稲田大學出版部

早稲田叢書

<p>(版九) 米國博士 ユッドロウ、ウィルソン 原著 法學博士 高田 早苗 譯</p> <p>政治現論</p> <p>一名 沿革實用政治學</p> <p>背皮上製美本 正價壹圓五拾錢 一千二百五十頁 小包料四角</p> <p>希臘、羅馬の古代より近世歐洲諸大國の政治制度の沿革及び現行の憲法行政法地方制度等を説明して細大漏す處なし世界政治制度の實況を知らんとする者必本書を讀め</p> <p>英國アルフレッド、マシューソン 原著 法學士 井上 長九郎 譯</p>	<p>(版四) 英國博士 ウォルフェ 原著 天野 爲之助 譯 柏原文太郎 譯</p> <p>國民銀行論</p> <p>一名 信用組合新策</p> <p>背皮上製美本 正價壹圓四拾錢 五百餘頁 郵稅拾四錢</p> <p>本書の目的は國民の勤儉心を養ひ資本勢力の調和を計り國家生産上に利益を與へんとするにあり、本書の如きは我邦信用組合の發達を助け社會問題解釋の指南車たるべきなり</p> <p>國際法 法學博士 中村進午 著</p>	<p>(版五) 英國博士 シヤウ、マック 原著 法學博士 田島 錦治 共譯 土子 金四郎 譯</p> <p>經濟政策</p> <p>附 外國貿易論</p> <p>背皮上製美本 正價壹圓四拾錢 六百五十頁 郵稅拾四錢</p> <p>政府と産業との關係、公正なる富の分配法、經濟と道德との關係、是れ皆本書の正解明瞭する所、外國貿易論、新著の見を以て外國貿易に關する一切の事項を論斷す</p> <p>英國博士、エー、キーエンス 原著 法學博士 天野 爲之助 譯</p>	<p>(版二十) 背皮上製美本 正價壹圓貳拾錢 八百餘頁 郵稅拾八錢</p> <p>經濟原論</p> <p>原著者は近世經濟學界の本領として歐米大陸に盛名あり英派の陣營を道はず獨逸の新奇な新はす所説穩健立論精確なり譯者本版に於て更に大訂正を加ふ</p>	<p>(版三) 背皮上製美本 正價壹圓參拾錢 六百五十頁 郵稅拾六錢</p> <p>新條約論</p> <p>最新の學理によりて改正條約を解釋し舊條約と改正條約との得失利弊より新條約實施に關し國民の心得可き事項に至るまで説き及ぼし感なし附録には我國と英、獨、露、米、佛等五大國との新條約正文を附す</p> <p>國際法 法學博士 中村進午 著</p>	<p>(版五) 背皮上製美本 正價壹圓貳拾錢 四百五十頁 郵稅拾四錢</p> <p>經濟學研究法</p> <p>不偏不黨公明正大の眼を以て經濟學研究の方針を指示し純正論議及歴史派の缺點、短所、偏見、誤謬を論議したるもの論議的確引證精確、方針を定むべきなり</p> <p>英國博士、エー、キーエンス 原著 法學博士 天野 爲之助 譯</p>
---	---	--	---	---	--

關西法學博士 野澤武之助著
國際法專攻 山口弘一著

國際私法論

冊一全

背皮上製美本 正價金四拾陸錢
六百餘頁 郵稅金拾六錢

本書の著者は共に多年身を斯學の研究に委ねるの人、共に購つて本書を成す、蓋し世間同類書中の自負たるや論なかるべし、學生の教科書に用ふるも可なり、學者の座右に供する亦可なり、

米國メーヨー、スミス原著
日本 吳 文 聰 譯

社會統計學

冊一全

背皮上製美本 正價金四拾陸錢
六百餘頁 郵稅金拾六錢

本書は最近の人口統計を基礎とし之を社會の現象に當て立論せるもの、左れば統計學及び社會學を修むる者の參考に適す初め政治經濟の學に志す者須く一本を座右に供ふべきなり

安部 磯雄著

社會問題解釋法

冊一全

背皮上製美本 正價金四拾陸錢
四百五十頁 郵稅金拾 貳 錢

世の社會問題を論ずる者多くは理論の片断を既に非れば徒らに狂熱の音句を連ねて空談放言するに過ぎず、平易の文を以て温健の思想を遣り同情ありて偏見せず熱心なれども道徳せず豊饒なる材料を採排して規距其序を失はざるは實に本書の特色とす

男爵林董 鎌田榮吉 栗原亮一序
法學博士 有賀長雄 鎌田榮吉閱
佛國學士會長
フナトール、ル、ホリエー原著
日本 林 毅 陸 譯

露西亞帝國

冊一全

背皮上製美本 正價金貳拾
八百五十頁 小包料四百

本書は露國の政治、社會、宗教の各方面より其組織及真相を縱横に解釋評論したるもの原書は觀察鋭利に過ぐるの故を以て露國に於ては禁書として發賣を禁止せられたるものと云ふ以て本書の價値を知るべし

法學博士 有賀長雄著

國 法 學

冊二全

背皮上製美本 紙數千四百頁
正價金參 圓 小包料四百

本書は有賀博士が從來日本に行はるる國法學の大抵獨逸國法學の精華に過ぎずして日本國法の編成と相容ざる學說を其儘取次ぐの弊を憂ひ日本獨立の國法學を構成せんとて、著したる者なり、其説く所日本國法沿革に始り天皇政府、議會、官廳、官吏、地方自治、法律命令行政、訴訟及行政裁判に及ぶ本書に於て政治及政黨の效用を學理的に解剖し之に基きて國家の運用を開示したるは是れ實に博士の創見なりされば本書の右に一歩を進めたるもの大進歩を加ふるものと謂ふべし

佛國 ムイ、ブローレル原著
日本 オブ、エラ、松平康國譯

政治罪惡論

冊一全

背皮上製美本 正價金參圓
三百五十頁 郵稅拾貳錢

本書は政治に涉れる罪惡を網羅す所なく是非々の處迄私意を挟まず實に痛切の危針對症の良藥なり正人之を讀まば欣然として強援を得たるを想ひ小人之を讀まば慨然として慄慄然として懼れん

米國ツオン、ダブリー、ハルツェス原著
法學博士 高田 早 苗 著
吉田己之助共譯

政治學及比較憲法論

冊二全

正價金壹圓五拾錢 郵稅各拾六錢
合本正價金貳圓七拾五錢 小包料四百

本書は歐米に於ける今代第一流の政治學者、ハルツェス博士の一大名著を譯述したるもの、一讀人をして政治學の要義、憲法の法理原則に通曉せしむ斯學研究者座右の珍寶たらん

法學博士 有賀長雄 校閱
文學士 樋山專太郎 編者

世 無 政 府 三 義

冊一全

背皮上製美本 紙數四百餘頁
正價金參圓 郵稅金拾貳錢

虛無黨に露國に限ると雖とも彼等と主義を同し消息を通ぜる社會黨無政府黨は歐米永到處出沒跳梁しときに播天動地の悲劇を演じ其掃蕩を計り撲滅を策するは既に世界の大問題となれり本書は即ち是等一切の病的秘密團體の起源來歴を巨細に探討研究したるもの也

米國フランシス、リマー原著
文學士 澤柳政太郎 譯

政治道德學

冊二全

背皮上製美本 正價金二圓五十錢
一千二百餘頁 小包料四百

政治下の國民たるに耻ざらんとするの士、政界の清新に志あるの士、政治家を以て世に立たんとするの士、世の教育家及倫理の學を研究せんと欲するの士は須らく本書を一讀せらるべし

島村瀧太郎著

新 美 辭 學

冊一全

背皮上製美本 紙數五百五十餘頁
正價金參圓三拾錢 郵稅金拾 四 錢

本書は全著者の新見に成れる者文章論より美學に歸結し、以て大方の批判を得んとす、且初學者の爲には、文學の入門たるべき準備と研究の過程とを有せり、文字に志あると否とを問はず國民の座右缺くべからざる良書也

西洋倫理學史

冊一全

網島榮一 著

背皮上製美本 紙數五百五十頁
正價金參圓三拾錢 郵稅金拾 四 錢
本書は有賀の重要な倫理思想を網羅せる者著者は斯學專攻の名家而かも再三稿を更へて成れる苦心の著なるが故に叙述繁簡其宜しきを得文章亦簡明暢一讀の下泰西二千年の倫理思想史の大體に通ずるを得べし

日清戰後外交史

冊一全

背皮上製美本 正價金二圓五十錢
一千三百餘頁 小包料六百

本書は發行旬日ならずして發賣を禁止せられし後註文に應じがたし

哲 學 史 要

冊一全

背皮上製美本 紙數五百五十餘頁
正價金參圓四拾錢 郵稅金拾 六 錢
本書は世の所謂哲學史が徒に哲學者の傳記學を羅列して以て足れりと爲す者と全く其派を異にし哲學上の諸概念及問題の發展に重きを置き全篇を通して哲學其者の發見を説き兼て學術上の諸問題が如何に發達し來りたるをも詳にせる者にて序次整然意旨明晰以て學者の參照に資すべき也

米國エ、ローレンス、ローエル原著
法學士 柴原鶴二譯述

政府及政黨

册一全

背皮上製美本 紙數七百餘頁
正價金壹圓五拾錢 郵税金拾六錢

本書は歐洲大陸に於ける政府及政黨の組織運用を詳説し、政黨の政府に對する態度、政府の政黨を御する方略等之を佛、獨、英、匈、伊、瑞其他の各國に涉りて一々事實に基き、清平に徹し讀者をして歴々晴るの想あらしむ若し夫れ一部最近政治史として視るも細叙精詳に見る所ならん思ふに憲政運用に對する絶好の參考書として本書を推すも蓋し溢美にあらざるべし

田中穂積著

高等租稅原論

册一全

背皮上製美本 紙數四百五拾頁
正價金壹圓貳拾錢 郵税金拾貳錢

本書題して高等租稅原論と云ふも雖も必ずしも初學者の閱讀に適せざるが故に非ず其論究する處より微細に入り普通原論に一步を進めたるものあればなり加之解説簡明にして行文平易先覺後進共に本書に須つ處少からざるべし

獨逸コンラート、ホルンハック原著
法學士 菊池駒治譯述

國家論

册一全

背皮上製美本 紙數四百五拾頁
正價金壹圓貳拾錢 郵税金拾貳錢

本書は比較法學の基礎に據り清平的に一般國家學を論じたるものにして各國法制の實際より歸納して巧に學理を構成したるは實に其主眼とする處なり、獨逸學士本校の囑を空ふせず苦心の譯成て茲に江湖に公にす、故て篤學者の閱讀を請ふ

近刊

法學博士 有賀長雄著

國際公法

獨逸ラバント著

國際法學

法學士 竹井新一郎著

帝國憲法論

英國ニコルソン著
經濟學 柴原鶴二譯述

法學士 副島義一著

日本帝國憲法論

文學博士 坪井九馬三著

史學研究法

獨逸オレンブルク著

佛學

浮田和良著

史學原論

故小山田興清稿

倭學戴恩日記

文學士 新見吉治譯

ブルタルコス偉人傳

アダムス原著

文學士 梅若誠太郎共譯

財政學

文學士 植原正直

財政學

早 稻 田 小 篇

故 酒井雄三郎著

十九世紀歐洲政治史論

册一全

正價金壹拾錢 郵税金四錢

最近八十年間に於て歐洲列國が經由せる政界の進化如何を一日して觀察し得るもの本書を讀て他に求むべからず

佛國ルイ・ルノー原著
法學博士 有賀長雄譯述
法學博士 宮本平九郎譯述
法學士 川新譯述

國際法論

册一全

正價金壹拾五錢 郵税金四錢

本書は國際法の概念を説き其淵源を詳にし斯學研究の參考たるべき諸大家の好著を紹介する等周到備も餘すなし

法學士 續田一著

支那貿易

册一全

正價金四拾錢 郵税金四錢

著者尙前に於て商務工業を觀察して得たる材料に據り英國の諸書を參照して成れるもの百般の狀況歴々觀るが如し

坂山正修著

非鐵道國有論

册一全

正價金貳拾五錢 郵税金四錢

歐米大家の所説に著者の意見を加へて成れるもの世の鐵道經濟を研究せんとする者の爲めに好箇の參考書なり

ドクトル、オグ、高木正義譯述
フイロソフイー

トラススト

册一全

正價金壹拾錢 郵税金四錢

經濟社會の大革命とも稱すべきトラススト制度の利害得失及其真相現狀等を明ならしめたるもの獨り本書あるのみ

小山松壽著

南清貿易

册一全

正價金五拾五錢 郵税金六錢

各國勢力範圍支那交通産業圖挿入
著者永く南洋に在てよく事情に精通す記事主として實地の觀察に基くが故に世間幾多の類書と大に其趣を異にす

英國アーチバルト、アール、コフ、ン原著
法學博士 立作太郎抄譯

最近之支那

册一全

正價金拾五錢 郵税金四錢

材料豊富にして觀察周到たる原著を平易明快に譯述せる者也支那問題に關する著書中優に自府の價値あるを信す

伯備 大隈重信講演

管公談

册一全

鮮明木版印刷竹俵入
正價金拾錢 郵税金四錢

習公の人物傳行今日に至りて大に論士の是非する所となる大隈伯談博の識を以て之を評説す本書の價値推して知るべし

網島榮一 耶蘇譯

快樂派倫理

册一全

正價金五拾五錢 郵税金六錢

希臘時代より今代に至る迄有ゆる快樂派學者の倫理説を歴史的に叙述且つ論評したるもの學者必讀の書なりとす

法學博士 高田早苗抄譯

帝國主義論

册一全

正價金四拾錢 郵税金六錢

帝國主義が支那問題を中心として世界に擴溢活動するの狀本書之を語りて遺憾なし時勢に志有るの士は必一讀せざるべからず

法學士 三木猪太郎抄譯

犯罪學

册一全

正價金四拾錢 郵税金六錢

犯罪の原因結果及犯罪方法を論究して餘す處なし我國の現状に對して本書の出づる決して偶然に非ざるを信す

ウイロービー及ボサンクイ原著
浮田和氏 解説

國家哲學

册一全

正價金六拾錢 郵税金八錢

最近の名著二種を採て比較解説せるもの最新の學説を窺はんと欲するの士は本書に依りて得る處尠からざるべし

獨逸 リースト 原著
法學博士 中村 進午 解説

國際公法

册一全

正價金六拾錢 郵税金六錢

他の類書に比して異彩を放てる原書を斯道の名家中村博士の縱横なる筆を以て解説を試む其の價値以て知るべし

杉山重義 解説

都市發達論

册一全

正價金四拾錢 郵税金六錢

本書は歐米の都市が如何にして發達し現今如何なる設備を有するやを細説して今後の方策に論及せるものなり

安部磯雄 解説

市制論

册一全

正價金四拾錢 郵税金六錢

本書は都市の法制的觀察にして市長市會理事會等に關する各國法制の長短を比較し其得失を論じたるものなり

文學博士 桑木嚴真 抄譯
關山 富抄譯

論理學綱要

册一全

正價金四拾錢 郵税金六錢

本原書は歐米の哲學界にありて「形式論理の發達の極度に達するものなり」との好評を博せるものにして其説を構ふるに正確堅固、組織亦整然として一糸の亂るゝ所なし殊に其説明の周到明瞭なる他に其比を見ず是れ譯者の本書を選ぶる所以なり論理を學ばんと欲する者の爲に必讀の好著とす

ドクトル、オア 渡邊龍聖
フイロソフイ 抄譯
田中 途 抄譯

倫理學綱要

册一全

正價金四拾錢 郵税金六錢

本書の特色は種々の倫理學説を抽へて最も公平に最も平易に叙述説明したるもの倫理學の門に入られとするの士は必ず一本に座右に備へらるべし



歴史叢書

歴史叢書

法學博士 高田 早苗 著

露西亞史 全一冊

正價金壹圓貳拾五錢 郵税金拾貳錢
總クローンス上製四百五十頁 鮮明地圖挿入
本書はラムホード氏の名著を基とし、傍ら博く東西の史書を參考して編成したるもの露西亞國以來今日に至る盛衰消長より其人情風俗宗教文藝に至るまで博覧詳叙す所なし從來露西亞史の缺乏に苦める學者は勿論東洋の風習甚だ急なるの今日志を天下國家に存するの士の一讀を要す

パナエラー、松平康國 編著

英國憲法史 全一冊

正價金壹圓貳拾五錢 郵税金拾貳錢
總クローンス上製四百五十頁 鮮明地圖挿入
著者は早稲田大學に講師として多年憲法史を講義し此種の好著なきを遂へて本書を公にせ

らる近時我國憲法の運用及議院の行動に就て多少の感を抱ける者及び法制史研究に思を潜むる者之を讀まば益し無量の利益あるべし

米國 ヲヤッドソン 原著

歐洲十九世紀史 全一冊

正價金壹圓貳拾五錢 郵税金拾貳錢
總クローンス上製四百餘頁 鮮明地圖挿入
書契ありて以來十九世紀の歴史は多岐難且多趣味なるものはならず然し簡潔明快の筆を以て文を行リ讀者をして一讀快哉を呼ばしむるものは蓋し稀なり本書の原著は此點に關して實にマッケンジー氏の「十九世紀」をも凌駕すと稱せらる其能く要を擧ぐ綱を提げ一目瞭然歐洲最近歴史を知悉せしむるもの此書に若くものなるべし

パナエラー、松平康國 編著

世界近世史 全一冊

正價金壹圓貳拾五錢 郵税金拾貳錢
總クローンス上製 紙數四百餘頁
鮮明地圖挿入

歴史は近世史より有益なるはなく近世史より面白きはなし然るに世間の著譯は唯筋書を讀むが如くにして趣味なく活氣なし今や松平氏の近世史は新面目を備へて世に出でたり記する所東西の交通に始りて維新會議に終る宛も歐洲十九世紀史の精華と云ふべき時代を包攝せらるるものにして其長技なる文章は權衡に發揮せられ簡明にして雄麗なり一讀大鳴水を以て歡迎せらるべきを疑はず

文學士 白石眞 編著

獨逸史 全一冊

正價金壹圓貳拾五錢 郵税金拾貳錢
總クローンス上製 紙數五百五十餘頁
鮮明地圖三葉挿入
獨逸は素々歐洲古國の一、然し一旦瓦解に近きてまた復活の運に向ひ半世紀の活動は遂にこれを以て歐陸の中原に覇業を成就せしめり

歴史叢書

世界林立の國家孰れか國史なからん然れども讀むて痛快思ふて壯烈なるもの獨逸史の如きは未だ曾てこれあらざる我國最近の文物制度獨逸に則るもの多し故に彼國の史に就て其由來を研究せむとする者極て稀なりこれ蓋し恰密なる史の著作の欠乏せるに因らずんばあらず本書の出る偶然に非ざるなり

文學士 坂本健一 編著

伊太利亞史 全一冊

正價金壹圓貳拾五錢 郵税金拾貳錢
總クローンス上製 紙數四百五十餘頁
鮮明地圖二葉挿入
伊太利亞王國は其建國の新なる其國土開闢の源淵遠くして幾多著名の史蹟を有する統一の大業遂に成て而かも文物制度の發達頗る見るべきものあるの點に於て、其の國情頗る我日本に似たる所あり隨て其國民の特質其長短所の岐るも所必ずや彼我相似たるものなくんばあらず左れば吾人が伊太利亞史を讀むに由て生ずる幾多の感興は自ら他の列國史を讀むと異なるものあるや必せり而して坊間未だ此國の史を詳にしたるものを見ずこれ本書の出る所以なり

秋澤 長田忠一 編著

佛蘭西史 全一冊

正價金壹圓貳拾五錢 郵税金拾貳錢
總クローンス上製 紙數四百五十餘頁
鮮明地圖三葉挿入
本書は身自ら其境を履んで親しく其國の文物に接し其國の人物に交れる秋澤居士得意の編述に依り盛衰興亡得失之を辨し詳略化しきを得川意最も周到を極む

近刊

- 澤田和民 編 希臘史
- 澤田和民 編 浮羅馬史
- 松平康國 編 英國史

文學士 村川 堅固 編

西班牙 葡萄牙史

文學士 坂本 健一 編

荷蘭 白耳義史

文學士 高桑 勳吉 編

北歐史

長田 忠一 編

土耳其 波留汗史

小崎 弘 道 編

米國史

長瀬 風 輔 編

中央 亞細亞史

文學士 高桑 勳吉 編

印度史

文學士 矢野 仁一 編

清國史

文學士 河合 弘民 編

近世 殖民史

經濟學叢書

經濟學叢書

伊國法學博士 ルイギー、コツサ原著
日本法學士 永井直好重譯

社會經濟原論

冊一全

總クローヌ 上製三百餘頁
正價金壹圓 郵税金拾錢
並製金八拾錢 郵税金八錢

本書は伊國經濟學の大家ルイギー、コツサ氏
が其深遠なる研鑽に基き該博なる學識を以て
斯學の大綱を説述したるもの理義公正所説簡
約而かも内容豊富なれば之を教科書として適
切なるのみならず一般研究の基礎と爲すに恰
當なること他に其類を觀ざる所なり

米國メーロー、スミス原著
日本吳文應譯

經濟統計學

冊二全

總クローヌ 上製八百餘頁
正價各金壹圓 郵税金拾錢
並製各八拾錢 郵税金各八錢

本書は各種の經濟問題を捕へ統計的に批評研
究せしものなり今や世間漸く空論の無益有害
なるを覺り事實に據りて經濟を行はんとす先
づ本書を讀破し統計的の理論及び實際に通じ
以て經濟學の指導と爲せば其世を益する蓋し
尠少なからざるべし

英國ダブリン、エー、シロウ著
日本信夫淳平譯

歐洲貨幣史

冊一全

總クローヌ上製 四百餘頁
正價金 壹圓 郵税金十四錢

本書は筆を歐洲に於ける金貨鑄造の創始に起
し輒近印度政廳の銀貨自由鑄造停止に到る其
間或は時の政策を學理に究め或は民人の休戚
を實際に徴し或は貨幣の消長に關する古來學
者の異見を道破する等就き去り就き來りて餘
蘊めなし蓋し近時右數の好きなり

經濟學叢書

米國エドワード、カロン原著
法學博士天野爲之助
伊藤 正 譯

金融之原理及其實際

冊一全

貨幣の原理金融の状況を論ずるの世間必ず
し其類に乏しからず、而かも其原理と實際
とを論究し兩者の關係を指示する本書の如き
は稀なり、世の銀行家、會社員、實業家は勿
論荷も志を經濟に寄するの一人一木を備へば其
得る所蓋し尠少なからざるべし

近刊

法學博士和田垣謙三郎 岸田虎三郎
コンラード氏經濟學

(上)國民經濟學 (中)經濟政策學
(下)財政學

法學博士松崎藏之助 岩城之寬譯
ハドレー氏經濟學

法學士 平田徳次郎譯
ダウニング氏貸銀論

法學士 桐生政次郎譯
ヘン、パワーク氏資本論

法學士 永井直好譯
ハッテン氏消費論

法學士 柳田國男譯
クラーク氏分配論

文學士 杉江楠人譯
クローレー氏交通機關論
マンター、オツ、ブーッ千葉鐵譯
埃國 價值論



法律叢書

法律叢書

法學博士 嶋山和夫 法學博士 穂積陳重
 法學博士 宮井政章 法學博士 戸水寛人批
 法學博士 岡村謙吉 法學博士 梅謙次郎
 帝國大學教授 フクトル レーンホルム 評
 法學博士 梅謙次郎 法學博士 菊池武夫 評
 獨逸伯林ハイムリヒ、テルンブルヒ原著
 大學教授 中村進平 法學士 古川五郎合譯
 法學士 堀田忠三郎 法學士 山口弘一

獨逸民法論 冊四全

附獨逸民法正文 正價金八圓
 第一卷 總則 第二卷 物權
 第三卷 債權 第四卷 親族、相続
 ●正價○第一卷金壹圓七拾五錢○第二卷金壹圓七拾五錢○第三卷金貳圓貳拾五錢○第四卷金貳圓貳拾五錢●郵送料○第一卷金拾八錢○第二卷金拾六錢○第三卷金貳拾錢○第四卷金貳拾錢●全部小包料九百文
 本書は有名なる獨逸の民法學者テルンブルヒ氏の著パンデクテンにして約三千五百餘頁の

大卷近世民法の一般原則を闡明して餘蘊なし本校専門の諸學士を煩すこと多年漸く完成出版するに至れり世間有爲の士幸に一木を座右に供して本書の眞價を列せられよ

法學博士 嶋山和夫 梅謙次郎批評
 獨逸ボンウイヘルム、エンテマン原著
 大學教授 法學士 堀内秀太郎 中村健一合譯

獨逸商法論 冊二全

附獨逸商法正文
 紙數千二百餘頁 背皮上製美本
 正價金壹圓五拾錢 小包料四百文
 原著者は獨逸法學界に於て名聲噴々たる斯學の大家にして本書は即ち其一代の大作なれば最新の法理に綴り纏羅無盡今世商法一般原則を説いて其の遺徳を思ふに我新商法は多く其基を獨逸に採れるを以て本書の如きは其法理を研究せんとする者の爲めに必要無類の參考書たるべし

法學博士 穂積陳重
 法學博士 宮井政章 序文
 法學博士 梅謙次郎
 伯林大學教授 フオン、リスト原著
 法學博士 岡田朝太郎校註
 法學士 乾正 孫子 政彦 共譯

獨逸刑法論 冊一全

總クローネ 紙數七百餘頁
 正價金壹圓八拾錢 郵送料拾六錢
 刑法改正に現下法律界の一般問題なり此時に際し最新學說の精華を採り學界を裨益せむことを認みて本書を上梓せり原著者リスト氏は獨逸伯林大學の教授にして學問深奥識見卓拔彼國に於ける斯學の重鎮たるのみならず其世界に於ける法學界の泰斗たり遂に刑法は其多年研究したる科目にして該博識其の遺徳を思ふ處殆んど稱讃すべからず而して一代の名著は今や乾正孫子岡田朝太郎の譯に成り加之岡田博士の嚴密なる校閲を経たり學界の最新に後れざらむと欲する學者實務家遂に一木を座右に備へんことを望む

法律叢書

獨逸ヘフタル 法學士 堀口九万一譯
 獨逸パール著 法學士 古川五郎譯
 佛國フィオラー著 法學士 宮本平九郎譯
 國際私法

最近刑法論 冊一全

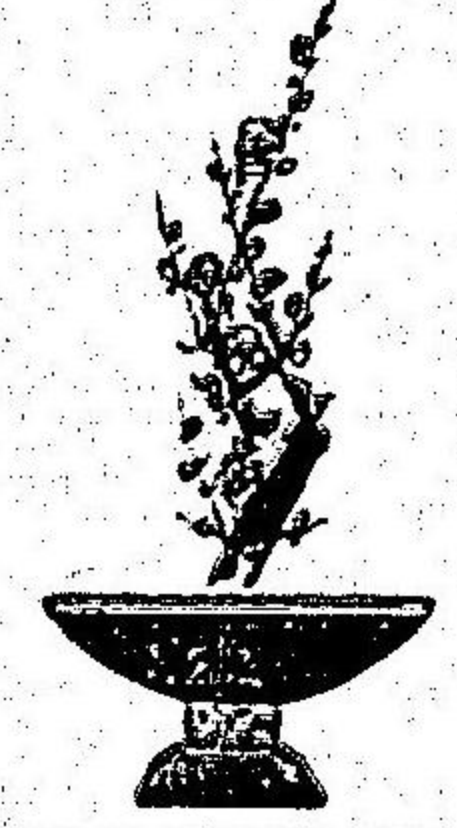
白耳義 プリンズ 原著
 法學士 時本勝三郎 共譯
 法學士 淺見倫太郎
 本書は名聲噴々たるプリンズ氏の名著を譯本淺見兩學士の手にて依て譯述せらるゝもの乞ふ發行の日を待て其の眞價を知られよ

近刊

獨逸 レーマン著
 法學士 古川五郎 共譯
 法學士 玉川次致
 法學士 里見三作
手形法論

法學士 小山温 法學士 鈴木喜三郎共著
民法要論

法學士 青山衆司著
商法要論



法律教科書

發行の趣旨

由來我國邦語教育に教科書を用うるは主に小
 中學等普通學の範圍に止り高等專門學術を教
 授するには統て口授筆記の方法を用うるが如
 し口授筆記必ずしも不可なるに非らず而かも
 單に之に頼る時は學生は筆記に忙殺せられて
 智識を練磨すること難し左れば學生に與ふる
 に簡練なる教科書を以てし之によりて先づ要
 領を得せしめ講師更に之を敷演して解説を
 試むるあらば研鑽咀嚼の餘裕始て生ずるに至
 り教育上大なる利益あらん是れ吾人が世の識
 者と共に夙に認むる所なるを以て茲に先づ法
 律教科書十數種を出版して素論を實地に試み
 んと欲す抑もこれ等法律教科書は専攻諸名家
 の編著に係り行文簡潔なると同時に義理明白
 なるが故に各種の愛讀者を始め世間一般の
 愛読に適當なること彼の冗漫なる註釋書と同
 日の論に非ざるべきを信す

法學士 小山 溫著

民法總則

正價金四拾錢 郵税金四錢

册一全

判事 今村 信行著

民事訴訟法

正價金四拾錢 郵税金四錢

篇一第

法學士 平沼 騏一 郎著

債權法總則

正價金六拾錢 郵税金六錢

册一全

法學士 牧野 菊之助著

親族法

正價金四拾五錢 郵税金六錢

册一全

法學士 宮田 四八 著

相続法

正價金四拾五錢 郵税金六錢

册一全

法學士 和仁 良吉 著

保險法

正價金四拾錢 郵税金四錢

册一全

法律教科書

法律教科書

法學士 青山 樂司 著

商法總則

正價金六拾錢 郵税金六錢

册一全

法學士 鈴木 喜三 郎著

物權法

正價金五拾五錢 郵税金六錢

册一全

法學士 青山 樂司 著

商法

正價金七拾五錢 郵税金八錢

册一全

法學博士 中村 進午 著

平時國際公法

正價金八拾錢 郵税金八錢
 特製金壹圓 郵税金拾錢

册一全

近刊

債權法各論

會社法

手形法

海商法

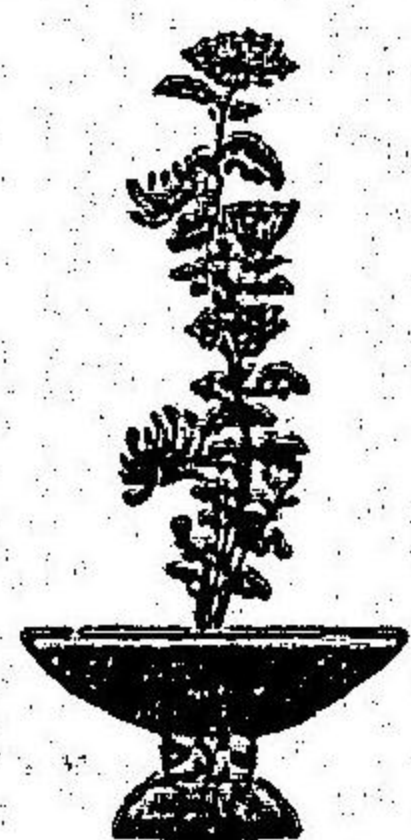
民事訴訟法 (第二編下)

刑事訴訟法

破産法

國際私法

戰時國際公法



教科書類及雜書

書雜及類書科教

附正四位 琴契 神農 (全部紙數)
文學博士 木村正雄 校訂 (約五千頁)

萬葉集代匠記

- 目録 正價金四拾錢 郵税金六錢
第一輯 正價金七拾五錢 郵税金八錢
第二輯 正價金七拾五錢 郵税金八錢
第三輯 正價金七拾五錢 郵税金八錢
第四輯 正價金七拾五錢 郵税金八錢
第五輯 正價金七拾五錢 郵税金八錢
第六輯 正價金七拾五錢 郵税金八錢

本書は万葉集注釋書中繁に渉り、尙に失せず、特に説見の卓拔と議論の壯快を以て實に不朽の名聲を文壇古今に轟かせしもの然も不幸にして在來の流布本は皆時調脱離しく、神契神師が流本に非ず、今原水とするは木村博士の所蔵にして今回新たに寛永刻本に據りて本文を加へたれば、固より在來諸本の比に非ず、本邦今この善本を出版完成せむと、史家國學家を始めとして有志の人士請ふ速に一本を座右に備へられよ (第七輯以下逐次發行)

理學博士 横山又次郎著

天文講話

- 總クローズ紙美本 鮮明木版九十九頁入
正價金壹圓拾錢 郵税金拾錢

本書の目的とするところは、歴史地理專攻者の參考用に供するにあり。されど、記事極めて平易なれば、初學者と雖も、難解の不便あることなし。天文の學未だ我が邦に遺らざる其の概要を知るもの今僅に數名の學者に止るのみ故に本書は歴史地理研究者に對しては勿論其の他有らざる方面の學科志望者に向て偉大の利益を與ふべきことを望むを希す

理學博士 横山又次郎著

地學概論

- 總クローズ紙美本 コロタイプ刷入
正價金九拾錢 郵税金拾錢

本書は地文界に關する諸般の現象を諸語體に叙述したるもの、其記事の體裁は普通の教科書類と異なり、通讀の際極めて理會し易きのみならず、又自然一種の興味を覺へて不意不知の間に新學の要領を會得するの仕組也。世人は既に著者は新道に於て多年経験の士なるを知らん、本書の價値又推して知るべき也。地文に志す天下の士一讀の榮を爲す

書雜及類書科教

早稻田大學 杉山重義編

英法兩國最近演說集

- Lord Herschell, Mr. Joseph Chamberlain, Mr. Arthur J. Balfour, Sir Henry Craunghall, Mr. Bismarck, Lord Salisbury, Mr. John Morley.
石版表紙類美本 最近價値挿入
正價金四拾錢 郵税金四錢

本書は我同盟國たる英國現時の政界に於て對名ある前記六大政治家の最近演說中より最も卓拔なる者を選擇集録し附するに其肖像を以てせる者なれば、讀者は視く其地に臨みて、其聲咳に接するの感あるべし、英國政界の口吻を探らん、欲する者若しくは英語に習熟せんとするもの必讀の良書にして、最も英法教科書に類すべし

佛人カミーン、シラウツ校訂
早稻田大學 安藤孝義編

佛語文選

- 新選類美本 細志川辰彦
正價金五拾錢 郵税金四錢

我國制度文物の進歩に従ひ佛語の必要を感じること益々切なり然るに初學者に對する從來の教科書は概して繁難宜しきを失ひ本邦の修學者に適するもの甚だ稀なり、本書は編者が多年教授の實際に基き編纂せられたるものにて、佛國古今の名文につき簡易にして興味あるを撰擇し簡より繁に入るの方法を執り以て學修の便に供し、又獨學者の爲めには本文中の不規則動詞に數字を附し其不定法を各頁下に示し、卷末には特に其の不規則動詞の體裁表を掲ぐる等編者の注意至れりと謂ふべし、蓋し此の種教科書中の自府なり

學藝軒 依田 百川序
香齋 龜谷 三九郎編

文章真訣

- 正價金七拾五錢 郵税金拾錢

金中庵序 土屋鳳洲序
三島中洲評 龜谷三九郎編

漢文綱要

- 正價金六拾錢 郵税金六錢

赤堀又次郎 千秋季長共編

國文平家物語

- 正價上銀金六拾五錢 繪圖金五拾錢
郵税金六錢

早稻田大學 增田康之助編

英語文筆軌範

- 總クローズ紙美本 紙數二百頁
正價金五拾錢 郵税金四錢

7
2

